

キラリ発進！
サステイナブルスクール

～ホールスクールアプローチで
描く未来の学校～



ACCU

Asia Pacific Cultural Centre for UNESCO
公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター

キラリ発進！
サステイナブルスクール

～ホールスクールアプローチで
描く未来の学校～



ESD重点校形成事業 ～輝け! サステイナブルスクール～ に期待すること

文部科学省国際統括官
日本ユネスコ国内委員会事務総長

森本 浩一

「国連持続可能な開発のための教育の10年（DESD）」の成果を振り返り、国連DESDの提唱国である我が国においてより具体的なESDの実践を推進していくために、平成27年に日本ユネスコ国内委員会教育小委員会ESD特別分科会が設置されました。この分科会では、今後のESDの推進方策として、ESDを広めるための取組や、ESDを深める（実践力を高める）ための取組、国際的にESDを推進するための取組について議論が行われました。その結果、学校現場でのESDの推進に向けた具体的イメージの提示や、学校間の交流の活性化に向けた支援、学校とNGO、企業等の地域の関係者との連携強化に向けたネットワークの形成などについて提言された報告書が同年8月にまとめられました。この報告書を受け、文部科学省では、平成28年度より、高い実践力を目指してESDに取り組む学校の活動を支援するためにESD重点校形成事業を実施することといたしました。

ESDは、世界情勢が大きく変革する中、身近な課題について自分ができることを考え、行動していくという学びが地球規模の課題の解決につながっていくという理念に基づいています。また、一昨年に国連で採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」でも、教育が目標の一つに位置付けられています。このように、教育が持続可能な社会作りのために欠かせないことは国際的にも認識されています。

本事業における24校の参加校は、全国の様々な学校種で形成されており、それぞれが特色ある取組を生かしながら、活動していく過程で進化を遂げていかれることを確信しております。地域社会との連携や、多様なステークホルダーとの関わりの中で、学ぶことと社会とのつながりがより強く意識され、持続可能な社会の実現に向けた取組が更に深化されていくことと存じます。本事業を通じて、全国のサステイナブルスクール同士の活動がつながり、地域のみならず全国的にもESDの実践が更に充実し、発展していくことを期待しております。

はじめに

本書は2016年9月に産声を上げた「サステイナブルスクール」の軌跡となる第一歩をまとめたものです。

平成28年度日本/ユネスコパートナーシップ事業（文部科学省委託事業）の一環として、「ESD重点校形成事業」が始まりました。個性豊かな持続可能な開発のための教育（ESD）の取組を実践している学校を「サステイナブルスクール」として、教育を通じて持続可能な未来、社会を構築することを共に目指して、それぞれが実践的な取組を行っていきます。

2016年9月全国公募を経て、24校がサステイナブルスクールとして採択されました。サステイナブルスクールは学校種もそして所在する地域も、ESD実践内容も多様です。サステイナブルスクールはユネスコスクールだけではありません。これまでのESDへの取組、そしてこれからの発展が期待される24校です。ESDをさらに深め、その活動を広げていくことに積極的、かつESDに魅力を感じその可能性を共に育んでいく24校です。

サステイナブルスクール誕生の背景には、日本のユネスコスクールが歩んできた歴史があります。日本のユネスコスクールは、2005年から始まった国連ESDの10年をきっかけに、ESDの推進拠点として位置づけられ成長してきました。この10年の間に加盟校の数が飛躍的に増加したのみならず、それぞれの学校のESDの実践が広がってきています。2015年以降もESDの推進は継続され、その実践は深化してきています。そして今やESDの実践はユネスコスクールに限られたものではありません。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、ユネスコスクール事務局としてユネスコスクールの加盟申請や加盟後の活動支援を行ってきた経験、ユネスコ本部の事業として国内外のユネスコスクールの国際協働学習プロジェクト（ESD Rice プロジェクトや気候変動プロジェクト）の運営実施の経験、さらに海外との教職員交流プログラムの企画運営の経験などを活かして、今後もユネスコスクールに限らず様々な学校や地域のESDの推進に貢献していく所存です。

最後になりましたが、本書をまとめるにあたり、ESDの専門家の皆様、そして実践の主役であるサステイナブルスクールの皆様には原稿を執筆いただくなど大変お世話になりました。改めて御礼申し上げます。ACCUは皆様と共に持続可能な未来へ向けての変化の担い手でありたいと願っています。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
ユネスコスクール事務局

目次

ESD 重点校形成事業～輝け！サステイナブルスクール～に期待すること -----2
はじめに -----3
目次・略語一覧 -----4
ESD 重点校形成事業について -----6
審査員の紹介 -----9
サステイナブルスクールの活動 採択校一覧および分布図 -----10
 気仙沼市立面瀬小学校 -----12
 気仙沼市立唐桑小学校 -----14
 登米市立米谷小学校 -----16
 江東区立八名川小学校 -----18
 杉並区立西田小学校 -----20
 目黒区立五本木小学校 -----22
 横浜市立永田台小学校 -----24
 新居浜市立惣開小学校 -----26
 阿南市立桑野小学校 -----28
 大牟田市立吉野小学校 -----30
 石巻市立牡鹿中学校 -----32
 大田区立大森第六中学校 -----34
 名古屋国際中学校・高等学校 -----36
 福山市立福山中・高等学校 -----38
 静岡県立下田高等学校南伊豆分校 -----40
 広島県立安古市高等学校 -----42
 愛媛県立新居浜南高等学校 -----44
 独立行政法人国立高等専門学校機構 福島工業高等専門学校 -----46
 千葉県立桜が丘特別支援学校 -----48
 愛知県立みあい特別支援学校 -----50
 NPO法人 東京賢治の学校 東京賢治シュタイナー学校 -----52
 特定非営利活動法人 横浜シュタイナー学園 -----54
 特定非営利活動法人 京田辺シュタイナー学校 -----56
 認定NPO法人 箕面こどもの森学園 -----58

【寄稿】 サステイナブル・スクールの時代
 ～国際的な潮流と日本の課題～ -----60
平成 28 年度サステイナブルスクール活動スケジュール -----61
【寄稿】 サステイナブルなスクール文化を育む ～3つの取り組み～ -----62
気候変動をテーマにしたホールスクールアプローチ実践プロジェクト始動！ -----63
サステイナブルスクール交流便り -----64
【特集】 学びの中心に ESD を据えよう
 ～イギリスアシュレー校の取組から見えるもの～ -----66
【インタビュー】 リチャード・ダン校長 ×ACCU 進藤由美 (教育協力部部長) -----82
ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) について -----84

【略語一覧】

ACCU	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
ASPnet	ユネスコスクール
ASPUnivNet	ユネスコスクール支援大学間ネットワーク
DESD	国連持続可能な開発のための教育の 10 年
ESD	持続可能な開発のための教育
GAP	グローバル・アクション・プログラム
SDGs	持続可能な開発目標
UNESCO	国際連合教育科学文化機関



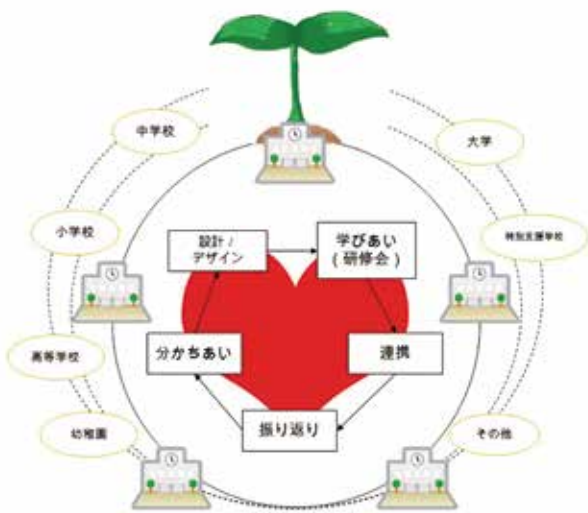
ESD 重点校形成事業について

ESD重点校形成事業開始の背景

国連持続可能な開発のための教育の10年（以下、国連ESDの10年）の最終年となる2014年11月に、日本政府とユネスコの共催により、愛知県名古屋市および岡山県岡山市において、「ESDに関するユネスコ世界会議」が開かれました。その会議において、国連ESDの10年の後継目標として「ESDに関するグローバル・アクション・プログラム（GAP）」が発表され、同年第69回国連総会にて採択されました。ユネスコ主導の下、2015年から2019年までの5年間、ESDはこのGAPに基づいて推進されています。

また、国内に目を向けると、日本ユネスコ国内委員会に設置されたESD特別分科会が「国連ESDの10年」の成果と課題を整理し、平成27年8月に「持続可能な開発のための教育（ESD）の更なる推進に向けて」と題する報告書を取りまとめました。報告書では、今後のESD推進方策として、ESD普及のための取組と並行してESDを深化させる（実践力を高める）ための取組の強化がうたわれています。学校全体で、また他校や地域との連携も視野に入れて活動を実践し、持続可能な未来の実現に向け、教育を通じて一人ひとりが変容していくことが期待されています。

このような経緯を受け、日本におけるユネスコスクール事務局である公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、文部科学省より「平成28年度日本/ユネスコパートナーシップ事業」の委託を受け、ESD重点校形成事業を実施することとなりました。



ESD重点校形成事業とは？

ESD重点校形成事業は、教育を通じて持続可能な社会を構築するために、実践的な取組を行う意欲のある学校を公募・選定し、その取組を発展および深化させるために必要な支援をする事業です。学びあい（研修会）→連携→振り返り→分かちあひ→設計/デザインのサイクルを繰り返すことにより、重点校（以下、サステイナブルスクール）に留まらず、ESDの活動を広げつなげていきます。

サステイナブルスクール形成の目的

- ・本事業の支援を受けて、サステイナブルスクールが事業に関わるすべての人に学びをもたらす活動を展開し、自らの思考・行動の変容によって成長すること
- ・他のサステイナブルスクールの成果を自校の取組に生かし、サステイナブルスクール同士も連携しながら多面的な魅力を持つ学校へ発展すること
- ・サステイナブルスクールが本事業の支援を受けてESD実践校として自立し、周辺の他の学校や地域・家庭を先導してESDの深化に寄与すること
- ・サステイナブルスクールの寄与によりESDが教育現場そして地域社会に根付き、持続可能な社会を構築していくこと
- ・加えて、その活動を世界へ向けて発信し、国際的に展開していくこと

選考プロセス

①審査基準の策定

第1回事業推進委員会（2016年5月開催）での協議をもとに、審査基準を策定

②委員による事前審査

事業推進委員会の委員数名が審査員として応募書類を事前審査

③審査員による事前審査結果の共有と審議

第2回事業推進委員会（選定会議、2016年9月開催）において、審査員による評価点と、以下3つの点を考慮し24校を選定

- ・地域、校種が多岐にわたり全体的にバランスがとれている
- ・ESDの取組内容にユニークな特色がある
- ・ユネスコスクールに限らない

④採択校決定（2016年9月中旬）

サステイナブルスクール選考のための枠組み

サステイナブルスクールを選考するにあたり、8つの審査項目を用意しました。

サステイナブルスクールとしての活動を日本に留めるこ

となく、海外へ積極的に発信していくことができるように、世界的にも使用されているユネスコ/日本ESD賞¹等の評価を参考とした評価枠組みが事業推進委員、当センターにて考案されました。

各8つの審査項目と対応する審査内容は次頁の通りです。



本審査基準の特徴は、本事業が「校内の取組をコミュニティ、全国、そして世界へ広げていく」という目的を持つことから「広がり（汎用性）」を含むところにあります。特定の学校環境においてのみ実施可能な高度な事例だけでなく、どの学校でも取り入れられるような身近な取組にもスポットライトをあてる評価項目となっています。これは、

ACCUがこれまでのESD普及支援活動を通じて培ってきた知見に基づいて提案したものです。

ACCUは事業推進委員とともに、上記の評価項目を軸として、すでにこれら全ての評価項目を完璧に満たしている学校ではなく、ESDの芽が伸びていく可能性に満ちている学校を選びたいという強い思いのもと選考を進めました。

¹ 2016年ユネスコ/ESD賞は変容、統合、イノベーションの3つの軸を選考基準としています。詳細はこちらをご覧ください。
<http://en.unesco.org/prize-esd/selection-criteria>

平成 28 年度日本/ユネスコパートナーシップ事業
ESD 重点校形成事業 審査基準

審査項目	内容
1 ビジョン (Vision)	<ul style="list-style-type: none"> ●持続可能な未来の実現に向けた目的が明確に示されている。 ●活動目的・目標と、活動内容に一貫性がある。
2 継続性 (Continuity)	<ul style="list-style-type: none"> ●今後 3 年以上継続的に活動していく意志が明確にある。 ●持続可能な社会を担う次世代を育てる明確な意志がある。
3 バランス (Integration)	<ul style="list-style-type: none"> ●社会・経済・環境がバランスよく教育活動に反映されている。 ●持続可能性に関する内容が明確に教育活動に反映されている。 ●教育課程への位置付けが適切になされている。
4 前に踏み出す (Empowerment)	<ul style="list-style-type: none"> ●学習と実践活動がつながっている。 ●学習者・実践者が対話を通して主体的に参画できるカリキュラムを作っている。 ●批判的に考える力、未来像を予測して計画を立てる力、多面的、総合的に考える力などを育む教育を行っている。
5 刷新性 (innovation)	<ul style="list-style-type: none"> ●既存の枠にとらわれず、ダイナミックに ESD 活動を創り上げている。または、創り上げようとしている。
6 協働 (Collaboration)	<ul style="list-style-type: none"> ●教師間がチームとして協働し、ESD 活動を推進している。または、その環境が整っている。 ●多様なステークホルダー（地域、家庭、NGO/NPO、企業）と協働し、教育活動を実践している。または、しようと努力している。 ●国内や国外であらゆる学校・校種と相互に学びあう活動を展開している。または、しようと努力している。
7 変容 (Transformation)	<ul style="list-style-type: none"> ●6. を踏まえ、それを学校に還元し学校も常によき変化を求め、柔軟である。 ●学校が社会を変容させる拠点であることを認識し、学校と社会の相互の学びを積極的に推進している。
8 広がり（汎用性） (Scalable/Replicable)	<ul style="list-style-type: none"> ●重点校として、あらゆる学校が活用し実践することができる可能性のある活動を実践する意欲を持っている。 ●実践に見出される工夫や方法、理論等を他の学校にも拡大し、協働していく高い意欲がある。

Copyright : ACCU

審査員の紹介

● 市瀬 智紀

宮城教育大学 教授

専門は ESD、国際理解教育、多文化教育、日本語教育。地域の小中高等学校の国際化・多文化化への対応を支援するとともに、ユネスコが国際的に推進する価値教育にキャッチアップするための研究を行う。

● 石丸 哲史

福岡教育大学 教授

専門は人文地理学、地理教育、ESD。教育課程に SDGs（持続可能な開発目標）を展開していく方法を研究するとともに、九州地方を中心としたユネスコスクールの支援と ESD の推進を行う。

● 永田 佳之

聖心女子大学 教授

専門は ESD、比較教育学、国際理解教育論やオルタナティブ教育論。ユネスコ等の国際協力事業に 20 年以上従事する。「ユネスコ/日本 ESD 賞」国際選考委員会委員を務めるなど、世界の ESD の理論と実践に詳しい。



● 成田 喜一郎

東京学芸大学 教授

専門はホリスティック教育、歴史学、カリキュラム開発。教職大学院にてカリキュラム開発の方法や学校組織マネジメント等を担当。中学校社会科教諭・副校長として長く現場に身を置き、実践者としての視点も併せ持つ。

● 吉田 敦彦

大阪府立大学
副学長/教育福祉学類教授

専門はホリスティック教育 / オルタナティブ教育、人間形成論、教育哲学・教育人間学。日本のシュタイナー学校に初期から関わり総合的研究を進めるなど、多様な学びを追求している。

サステイナブル スクールの 活動

2016年9月に24校のサステイナブルスクールが採択されました。次頁より採択時の各学校の取組について審査時の注目ポイントとともに紹介いたします。

サステイナブルスクール 採択校一覧

学校名	校種	都道府県
① 気仙沼市立面瀬小学校	小学校	宮城県
② 気仙沼市立唐桑小学校	小学校	宮城県
③ 登米市立米谷小学校	小学校	宮城県
④ 江東区立八名川小学校	小学校	東京都
⑤ 杉並区立西田小学校	小学校	東京都
⑥ 目黒区立五本木小学校	小学校	東京都
⑦ 横浜市長永田台小学校	小学校	神奈川県
⑧ 新居浜市立惣開小学校	小学校	愛媛県
⑨ 阿南市立桑野小学校	小学校	徳島県
⑩ 大牟田市立吉野小学校	小学校	福岡県
⑪ 石巻市立牡鹿中学校	中学校	宮城県
⑫ 大田区立大森第六中学校	中学校	東京都
⑬ 名古屋国際中学校・高等学校	中・高一貫校	愛知県
⑭ 福山市立福山中・高等学校	中・高一貫校	広島県
⑮ 静岡県立下田高等学校南伊豆分校	高等学校	静岡県
⑯ 広島県立安古市高等学校	高等学校	広島県
⑰ 愛媛県立新居浜南高等学校	高等学校	愛媛県
⑱ 独立行政法人国立高等専門学校機構 福島工業高等専門学校	高等専門学校	福島県
⑲ 千葉県立桜が丘特別支援学校	特別支援学校	千葉県
⑳ 愛知県立みあい特別支援学校	特別支援学校	愛知県
㉑ NPO法人 東京賢治の学校 東京賢治シュタイナー学校	その他	東京都
㉒ 特定非営利活動法人 横浜シュタイナー学園	その他	神奈川県
㉓ 特定非営利活動法人 京田辺シュタイナー学校	その他	京都府
㉔ NPO法人 箕面こどもの森学園	その他	大阪府

気仙沼市立面瀬小学校

面瀬発!! 今を見つめ 未来へ漕ぎ出す 環境・海洋教育プロジェクト

これまでの活動

ねらい (GOAL)

人とつなぎ 自然とつなぎ 未来とつなぎ 社会の担い手を育む ESD の推進

地域の人とかかわり、自然とふれあいながら、「海と生きる」ふるさと気仙沼への思いや考えを深め、自分の考えを表現し、

行動できる「持続可能な社会の担い手」としての児童の育成を目指す。

活動内容 (ACTIVITY)

学区には、古くから地域の水田を潤し、気仙沼湾の生態系や養殖業を支えてきた面瀬川が流れ、児童が生物多様性や山・川・里・海とのつながり等について学ぶ最適な環境が整っている。震災後には、地域社会の課題を背景に「復興」「町づくり」という新たな創造の視点を取り入れた。恵まれた学習フィールドを生かし、地域の企業や行政、大学等と連携・協働し、地域に根ざした探究型の学習活動を展開している。

1年生「おもせのしき」(野菜づくり 面瀬川・磯遊び 幼保との連携 天旗あげ)

四季を通じた栽培活動や遊び、季節の行事等を通して身近な自然や人々とふれあい、地域のよさに気づき、地域に親しみをもつ。

2年生「はっけん おもせ」(面瀬川の生き物 身近な野菜づくり 復興まちたんけん)

季節の様子や自然、いきものを観察し、川や海の自然に進んで親しもうとする。野菜の栽培や町探検を通して、地域の人と触れ合い、植物の変化や自然環境と人とのつながりに気付く。

3年生「みらいにのこそう 面瀬川のいきものたち」(水生生物調査 地域の人と野菜づくり 生き物図鑑)

いきもの調査と観察を通して、面瀬川には多様な生物が生息していることに気づき、川・海と生命のかかわりについて考える。

4年生「山・里・海の生命を育む面瀬川」(水路観察 源流探検 面瀬川の歴史「森は海の恋人」学習会)

面瀬川流域や河口域の土地の使われ方等、面瀬川と生活のかかわりを探究し、水辺環境を守るためにできることを考え、発信する。

5年生「海と生きる気仙沼～港町元気プロジェクト」(港町調査 漁船見学 親子魚料理教室 養殖体験)

産業、食、文化等の視点から地域を多面的に捉え、自然環境と産業のかかわりを探究し、海洋環境について考えたことや漁業復興への思いを発信する。

6年生「創生面瀬～ぼくらの桃源郷プロジェクト」(ふるさと農園づくり、地域住民との交流)

町づくり協議会と連携を図り、よりよい地域の在り方について探究し、地域の人と共に「面瀬川ふれあい農園」活動に取り組み、ふるさとへの思いを発信する。

変容 (TRANSFORMATION)

面瀬川や海が育んできた環境にかかわり、学びを深めることは、自分たちの生活の在り方を見直し、地域のよりよい未来について考え、持続可能な社会の構築を目指す児童を育てる上で極めて意義あることである。

6年間の継続した取組を通して、児童には、地域の人や自然

を大切にし、それを未来につなげるために自分にできることを進んで行おうとする意欲が生まれ、実践に向けての態度が育ちつつある。学習したことで得た知識や体験の意味を理解し、相互に関連付けながら考える思考力が高まってきている。



これからの活動

■ 1年目

目指す資質・能力の育成に向けて、地域に根ざした探究的な学習活動を継承しつつ、児童や地域の実態に合わせて、海洋教育や町づくりの新たな視点を取り入れ、活動カリキュラム等の見直しを図りながら実施する。

地域人材、地元企業、大学、各専門機関との連携の継続と強化に努める。

市教委指定海洋教育推進実践校、海洋教育パイオニアスクールプログラム採択校として、他校との交流を通じて学習成果の発信を図る。

■ 2年目

前年度に見直したカリキュラムを実施し、成果を検証する。ASPnet や海洋教育推進実践校のネットワークを活用し、大学等の専門機関や他校と連携・協働しながら学習を進める。新学習指導要領を視野に入れ、主体的・協働的な学びを実現するための方法等を取り入れながら、実践的な研修を深める。

■ 3年目

海洋教育の視点を取り入れながら、主体的・協働的な学びの実現に向けて、従来のカリキュラム内容の更なる充実を努め、学習の成果や児童の変容を広く発信する。

審査時の注目ポイント

地域に根ざした探究的環境学習プログラムの実践校として実績がある面瀬小学校は「こどもサミット」の会場校としても貢献。この事業への参加を機に、サステイナブル・スクールの先進校として国内外とシナジーを創ってほしい。特に ASPnet の国際的なネットワーク事業等も活用して、海岸近くに位置する学校ならではの気候変動教育にもホールスクールで取り組まれることを期待します。(永田先生)

学校情報

学校名 気仙沼市立面瀬小学校
 児童・生徒数 320名
 住所 〒988-0133
 宮城県気仙沼市松崎下赤田 58 番地

TEL (0226) 22-7800
 FAX (0226) 24-7215
 E-MAIL omo-s14@marble.ocn.ne.jp
 HP <http://kesennuma.ed.jp/omose-syou/>

気仙沼市立唐桑小学校

未来につなげよう！豊かな海を！— カキ養殖体験活動を中心とした取組を通して —

これまでの活動

ねらい (GOAL)

カキ養殖を中心とした体験活動を通して、唐桑の海の豊かさと人との関わりやつながりを実感し、ふるさと唐桑が今後も持続可能な社会として発展していくことができるよう、探究しながら実践する力を養う。

1. 「海に親しむ」ために

海の豊かな自然や身近な地域社会の中での様々な体験活動を通して、海に対する豊かな感受性や海に対する興味関心等を培い、海の自然に親しみ、海に進んで関わろうとする児童を育てる。

2. 「海を知る」ために

海の自然や資源、人との深いかわりについて関心を持ち、進んで調べようとする児童を育てる。

3. 「海を守る」ために

海的环境について調べる活動やその保全活動などの体験、山での植樹体験等を通して、海的环境保全に主体的に関わろうとする児童を育成する。

4. 「海を利用する」ために

水産物や資源、船舶を用いた人や物の輸送、また、海を通じた世界の人々との結び付きについて理解し、それらを持続的に利用することの大切さを理解できる児童を育成する。

活動内容 (ACTIVITY)

1・2年生 生活科

「やさいをそだてよう」

ジャガイモやサツマイモ、大根等の栽培を通して、地域の方々との関わりを深めてきた。海との関わりをもたせるために「海に親しむ」活動を取り入れている。拾った海藻を使った海藻おしば作りやサケの飼育・放流活動を行った。

3年生 総合的な学習の時間

「おいしい野菜を育てよう」

豊かな土の秘密を探るなど科学的な視点を加えて、大豆、枝豆、トウモロコシなど様々な野菜の栽培活動を行った。地域の方々との関わりを深めながら、作物を育てるための様々な工夫や努力を理解させることができた。「海に親しむ」活動として、海藻肥料を使った大豆栽培を行った。

4年生 総合的な学習の時間

「カキの秘密を探ろう」

4年生からカキ養殖体験に取り組む。種カキをロープに挟み込み、翌年の「耳つり体験」への関連をもたせる。カキの生態についての基礎的な知識などを調べさせた上で、専門家の方に尋ねたり、カキの解剖に取り組んだりしながら、活動する。

5年生 総合的な学習の時間

「おいしいカキを育てよう」

カキを大きく育てる「耳つり」という養殖方法を体験し、養殖に携わる方の話を聞きながら、カキが生長する条件となるプランクトンの重要性を学習する。エサとなるプランクトンが豊富な海にするためには、森が必要だということも理解する。「森は海の恋人植樹祭」に参加し、植樹を行う。

6年生 総合的な学習の時間

「唐桑の素晴らしさを伝えよう」

カキを大きく質の良いものにするための「温湯処理」の作業を見学し、作業の大変さとカキ筏の周りの豊かさを実感する。「カキの水揚げ体験」においては、「温湯処理」をしたものとしらないものを比較し、その成長の違いを感じ取らせた。また地元の産業祭りに参加し、販売の活動体験を通して、「販売の仕方」や「安心安全な食」についての考えを学んだ。唐桑の素晴らしさを紹介するパンフレットを事前に作成し、それを配布することで情報発信を行った。「唐桑の海」の豊かさに改めて気づき、自分たちがしなければならないことは何かを考えさせることができた。



変容 (TRANSFORMATION)

生活科・総合的な学習の時間を中心に、他教科との関連を図りながら活動を推進することができた。児童は、自分たちが生

まれ育った地域が海と密接なつながりを持ち、自然への感謝の気持ちをもって生活していることを感じ取ることができた。

これからの活動

■ 1年目

関連諸団体と連携しながら、計画的に取り組んでいく。活動の成果は新聞や活動記録などの掲示、保護者や地域の方を招いての発表会、ホームページへの掲載等により、できるだけ広く伝えるように工夫していく。

■ 2年目

反省点を洗い出し、目標達成に向けてより有効であったもの、あまり効果が期待できないものを明確にしていく。有効

であったものはさらに指導方法の工夫などにより発展させていく。特に、体験活動においては、活動ありきにならないよう、事前・事後の指導を充実させる。

■ 3年目

取組の総括を行い、活動の発展的な継続を目指していく。また、近隣の学校との連携をより密接にしていくために、合同で取り組むことができる活動や交流を図ることができる活動を模索していく。

審査時の注目ポイント

いつまでも海と共に生きていく。「海」という存在をコアにおいた総合学習が、持続可能な暮らしをリアルに支えるESDになっている。「森は海の恋人」の活動に象徴されるような、あるものが他の全てのものとつながっていることを、「海」を通して学びとっていく。そのつながりを忘れないことが、ESDの核心にある学びになるのでしょう。(吉田先生)

学校情報

学校名 気仙沼市立唐桑小学校
 児童・生徒数 82名
 住所 〒988-0533
 宮城県気仙沼市唐桑町明戸 208-6

TEL (0226) 32-3142
 FAX (0226) 32-3071
 E-MAIL karakuwa-sho@kesennuma.ed.jp
 HP http://www.kesennuma.ed.jp/
 karakuwa-syo/

登米市立米谷小学校

WA! 米谷

KEYWORD

国際理解教育 世界遺産や地域の文化財等に関する学習



これまでの活動

ねらい (GOAL)

児童自らが価値観を見つめ直し、持続可能な社会づくりに参画するための力を育てる。

活動内容 (ACTIVITY)

本校はこれまで、生活科・総合的な学習の時間を中心としたESDカレンダーの作成を進め、地域の自然や文化を生かした教育活動「自然・社会・人とのつながりプロジェクト」を地域住民とともにやってきた。

「自然とのつながり」では、川をテーマに体験的な学習を取り入れ、豊かな自然を再認識させるとともに、この自然を未来に引き継ぐために何ができるかを考えさせる。

●北上川プロジェクト

2年生が北上川支流の生き物調査を行い、身近な川にたくさんの貴重な生き物が生息していることを知る。また、4年生が北上川の歴史や自然、人との関わりや活動を通して、そこに暮らす人々の思いや願いを知り、この環境を守るために何ができるかを考える。

「社会とのつながり」では、地域の歴史や伝統文化を知り、大切にし、継承していくことで、地域に愛着をもち、大切にしていきたいという思いを育む。

●歴史+伝統芸能プロジェクト

3年生が米谷地区の歴史を調べることで、米谷のよさに気づき、地域の一員としての自覚を高めるとともに、米谷のよさを引き継ぐために何をすべきかを考える。また、4～6年生が保存会の方々のご協力をいただきながら、地域の伝統芸能「細野神楽」を引き継ぐ。

●伝統野菜プロジェクト

5年生が伝統野菜の栽培を通して、登米市の野菜の素晴らしさや種を守ってきた人々の思いを知り、登米市の産業や伝統を守ってこうとする気持ちをもつ。

●伝統料理プロジェクト

6年生が伝統料理を調べることで、それぞれの地域の特性や歴史に目を向け、他地域の文化を受け入れるとともに、自分たちの地域に残る文化も大切にしていこうとする気持ちをもつ。

「人とのつながり」で、地域との関わりを深め、協働し、自分に何ができるかを考えさせていく。更に、国内外の児童・生徒と交流を行うことで、理解の深化や思考の広まりを図る。

●福祉プロジェクト

5年生がキャップハンディ体験や地域の老人福祉施設訪問を通して、お年寄りの方々の気持ちを理解し、優しい気持ちで接しようとする態度を育む。また、学校行事(学芸会等)に招待し、交流を図る。

●栽培プロジェクト

1～6年生が地域の方に栽培方法を教えてもらいながら、学校農園で野菜を育てる。また、お世話になった地域の方を招待し「ありがとう集会」を行い、その際育てた野菜を使って「芋煮」を作りごちそうする。

●地域の方々とのふれあい

1年生の自然探索、2年生の川の生き物調査や町探検、3年生のキャベツ農家見学や地域の昔話、4年生の川下りやサケの採卵・放流、5年生のミシン補助、6年生の調理補助等、いろいろな場面で地域の方々のご協力をいただくとともに、交流を行っていく。

●ラディッシュプロジェクト (H28年度)

2年生がアメリカ(フロリダ)と京都の小学生と、ラディッシュの栽培という共通体験を通して、栽培の悩みを話し合ったり、成長の様子を報告し合ったりしながら、ともに収穫の喜びを味わう。また、交流を通してお互いの地域の良さや文化を理解する。

6年生では、これらの活動を踏まえ、これからの米谷の未来を考えていく「町の幸福論」を展開していく。

これからの活動としては、他地域との交流を積極的に行い、これらの活動を深化させていく。

変容 (TRANSFORMATION)

「自然・社会・人とのつながり」を重視した教育活動を通し、地域の良さを発見したり、地域の課題を見つけたりすることができた。特に、いろいろな人との関わりから、コミュニケーション能力を養うことができるのはもちろんのこと、地域の

方々の思いに触れることで、地域への思いをより深めたり、活動を深化させたりしている。また、地域のコミュニティ作りに寄与することで、地域とwin-winの関係を築くことができつつある。

これからの活動

■1年目

ユネスコスクールを通じたネットワークづくり
ESDカレンダーの作成、活用と見直し
地域素材を生かした計画や活動

■2年目

活動の充実、発展

国内外の学校との交流

交流推進による児童、教師、地域のESD理解の深化

■3年目

活動の充実、発展

反省に基づいた継続的な活動の計画立案

交流活動による教師の視野拡張と研修

審査時の注目ポイント

登米市立米谷小学校の児童は、米谷を暮らしと学びのフィールドとして伝統野菜を栽培し、代々受け継がれたなげたうりの種の意味を引き継ぎました。ここにESDの土壌と種となる6年間一貫のカリキュラムがあります。そして1927年にアメリカから贈られた青い目の人形・メリーが児童の歴史と地域を超えた「学習財」としてあります。(成田先生)

学校情報

学校名 登米市立米谷小学校
児童・生徒数 208名
住所 〒987-0902
宮城県登米市東和町米谷字越路75

TEL (0220) 42-2006
FAX (0220) 42-2049
E-MAIL maiya-syo@city.tome.miyagi.jp
HP http://www.tome-svr.jp/~maiya-syo/html/

KEYWORD

防災学習 生物多様性 気候変動 エネルギー学習
環境学習国際理解学習 世界遺産や地域の
文化財等に関する学習 その他

江東区立八名川小学校

「ESD」「地域密着」「愛」= 未来を豊かにしていく学び



これまでの活動

ねらい (GOAL)

サステナブルスクールとして持続可能な社会の実現に向けた教育のあり方について、研究・実践と発信・交流を続け、充実した学校教育を実現するとともに、日本と世界の教育改革を推進すること

活動内容 (ACTIVITY)

平成 28 年度の研究の重点は、次のようになっている。

1 対話型授業の充実

子どもの学びを深めるには、テーマについて友達と話し合ったことをもう一度自分で考え直し、再び友達と意見を交換するといった対話を繰り返し行うことが大切である。そこで、目白大学名誉教授 多田孝志先生にご指導いただき、対話が授業を充実させる要件を明らかにしてきた。これらの要件を本校の特色的な活動である俳句教育や各教科の授業など教育活動全体に適用することで、対話型授業の充実を図っている。

2 ESD カレンダーを通じたカリキュラムマネジメント

研究初年度より取り組んできたのが、ESD カレンダーの作成と実践である。教科を 1 つ 1 つ 独立したものとしてのみ捉えるのではなく、相互の関係性を作り出していくことで、子どもたちの学びの意欲を高めていった。また、既習内容をつなげて活用することで、子どもの学びの深まりを指導者が実感することができた。教師の指導観の変革も期待できる。

3 「学びに火をつける」問題解決的な学習過程作り

本校では、児童の主体的な学習を促進する上で、導入部分を重視している。単元を貫くような学習材との出会い、自分に何かできないだろうかと思わせるような学習問題との出会いなどを教師がプロデュースすることで、子どもの学習意欲を喚起するのである。

4 学びの発信

本校では、1 月末に生活科及び総合的な学習の時間の学習発表会を行っている。自分が調べてきた事に対するコメントをもらったり、異年齢の学年が発表を自由に聴き合ったりすることを通して、互いの刺激になっている。また、教員同士の実践交流会も開催している。お互いの実践を伝え合うことで、自校はもちろん他校の ESD も拡大、深化させることができた。

変容 (TRANSFORMATION)

1 学びに火をつけることで、児童は主体的に学び、調べ、オリジナリティーあふれる発表や実践に取り組む姿を示すようになった。それは日常の学習にとどまらず、集会活動や学芸会、八名川まつり等の場でも顕著に示され、学校教育全体が活性化している。

2 「Think Globally, Act Locally」を信条に、地域に根ざした学習を進めてきた。いわゆるきれい事、やらされる事ではなく、自分たちが本当にできることは何か、また、それは本当に影響のあることなのかを考えることができてきている。子どもが本気で考えたこと、取り組もうと

することに対し、協力して下さるご家庭も増えた。

3 特色教育である俳句の学習では、自然を優しく見る目が育っている。また俳句を披露し合う句会では、ほめ合うこと、高め合うことが習慣的になっているため、自分と違う感性を認め合う素地となっており、それ以外の学習にも良い影響を与えている。

4 平成 24 年度から 27 年度までの間に、ユネスコスクール等 163 校及び、93 の関係機関等、延べ 500 名以上との実践交流が進んだ。

これからの活動

■ 1 年目

<校内体制>

ESD について常に学び直す。これまでの学習にどのような価値があったのかを再度振り返り、ESD に取り組む意義を 1 人 1 人が考える。

<校外に向けて>

今年度より、八名川まつりと ESD パワーアップ交流会を同日開催とし、児童の姿と研究実践と両面からの情報発信に努める。また、国内の優れた実践校との人的な交流も進め、相互に学び合うことで、研究の充実と視野の拡大を図る。

■ 2 年目

<校内体制>

学習指導要領の改訂を踏まえ、教育課程の見直しを図る。研究推進委員会と俳句・ユネスコ委員会で連携して、持続的に ESD に取り組める体制を構築する。教員の異動をも想定し

て、定期的に ESD に関する研修を行う。

<校外に向けて>

八名川まつり、ESD パワーアップ交流会の継続・拡大を図り、情報発信に努める。教育視察団等の積極的な受け入れと、職員を他校の研修会等に積極的に派遣する。

■ 3 年目

<校内体制>

新学習指導要領を踏まえた教育実践を進める。校内分掌の中で ESD 推進に関わる教員を複数任命し、研究・実践と発信力を一層強化する。

<校外に向けて>

八名川まつり、ESD パワーアップ交流会の発展と充実を図り、情報発信に努める。海外からの教育視察団等も積極的に受け入れる。シンポジウム等へ職員を講師として派遣することを通じて、ESD に対する深い理解と責任感を育てる。

審査時の注目ポイント

江東区立八名川小学校は、7 年間にわたる活動の中で、「ESD カレンダー」などを活用した教科間の往還や「子どもの学ぶ心に火をつける」による問題解決的な学習指導のあり方を全国に提示してきた「刷新性」のある学校です。児童による成果発表の場としての「八名川まつり」や、「ESD パワーアップ交流会」という教員交流の場を通して、サステナブルスクールのモデルとなる取組みを示していただけることを期待しています。(市瀬先生)

学校情報

学校名 江東区立八名川小学校
児童・生徒数 365 名
住所 〒135-0007
東京都江東区新大橋 3-1-15

TEL (03) 3631-2260
FAX (03) 3631-3127
E-MAIL t-tejima@koto-edu.jp
HP http://www.koto.ed.jp/yanagawa-sho/

杉並区立西田小学校

人・自然・社会とのかかわりを大切にし、気づき、考え、行動する子を育てる

KEYWORD

生物多様性 環境学習 国際理解
世界遺産や地域文化財等の学習



これまでの活動

ねらい (GOAL)

「助け合う子」の育成を重点目標とし、全ての教育活動において、「共に学び」「共に考え」「共に創る」西田小学校を目指し、人・自然・社会とのかかわりを大切に、自分を見つめ、考え、行動するとともに、他者を尊重し、互いに認め合い、高め合っていく活動を通して、助け合う力を伸ばす。

活動内容 (ACTIVITY)

1年 「森となかよし～森のすてきを伝えよう～」

オイスカの「積木のシャワー」の体験をきっかけに、秋の森と遊ぶ活動を行った。木の実や葉などを利用した「森のお店屋さん」を計画し、楽しみながら自然に触れる体験を取り入れた。冬の森では、ネイチャーゲームで観察力や想像力を養いながら、児童が撮影した「森のすてき」を紹介し、1年間の学習を報告した。

2年 「自分たちで調べた西田遺産の魅力を伝えよう」

世界遺産を比較する活動をきっかけに、地域の良さに着目した活動に発展した。町探検をする中で自分たちが推薦する「西田遺産」を考え、最後はガイドツアーを企画して保護者を案内し、地域の文化財の素晴らしさを発信した。

3年 「自然とともに暮らそう」

理科の学習やヤゴの救出活動がきっかけとなり、地域の環境が昆虫にとって住みよい環境であるかを課題にもった。自分が選んだ昆虫の生態を調べながら、自然環境のあるべき未来像を各自が考え、「西田昆虫マップ」を基に昆虫が住みよい環境づくりに取り組んだ。より良い環境が続くための報告を行いながら、周囲に協力を訴えた。

4年 「みんなに優しい町づくりものづくり～みんなの不便を解決しよう～」

聴覚障害のある方との交流、ユニバーサルデザインの学習をきっかけに、身近な人の困っている現状を話し合い、町づくりを提案する課題をもった。児童はインタビューを重ねながらコミュニケーションの取り方や対応策をまとめ、体験コーナーで説明しながら優しい町づくりの必要性を訴えた。

5年 「日本のよさを語り、西田から世界に発信しよう」

移動教室で学んだ富士山レンジャーの取組や、オイスカの子供環境親善大使との交流をきっかけに、日本の親善大使として何を伝えるかを課題にもって取り組んだ。地域のつながりや「おもてなしの心」の他、「和食器」の学習から伝統文化などにも目を向け、自分で考えた日本のよさについて発表した。

6年 「世界に向けて羽ばたこう」

難民問題に関するユニクロの「服のチカラプロジェクト」への参加や、テレジン収容所の話や絵画を鑑賞する学習から平和について考える活動に取り組んだ。単元後半では、未来が平和であるために自分ができることは何かを課題とし、行動計画を立て、実践したことを報告した。

変容 (TRANSFORMATION)

●児童は、身近な自然環境に関心をもつとともに、課題意識をもって積極的に調べたり、まとめたりする姿が見られるようになった。

●教師においては、柔軟な発想をもって単元づくりに臨む姿勢が身に付き、児童の思考を深める工夫や手立てを積極的に考えるようになった。

これからの活動

■1年目

- 各学年のテーマを確認し ESD カレンダーを作成するとともに、テーマに即した単元を作成し、授業実践を行う。
- 学習者のノート・作品等による学習の深まりを各担任で確かめながら ESD の取り組みについて効果を検討する。
- ESD 子供報告会を実施し、学習者の成果を確認するとともに、学習効果を保護者や地域にも発信する。
- 学校評価等を活用し保護者への意識調査と考察を行う。

■2年目

- 児童の学びの過程を重視した授業を見直し、学習者のノート・作品等による学習の深まりも調査する。
- 児童および教員による学習評価を検討するため、プロトコル調査を導入するとともに評価項目の検討を行う。

- サステナブルスクールとして授業公開を行うとともに ESD 子供報告会の実施を継続し、学習の深まりを検討する。
- ESD の取組を委員会活動や学校行事の在り方にも検討を広げ、児童が日常的にかかわる工夫を取り入れる。

■3年目

- 評価項目について他校や異校種とも連携しながら検討し、学習活動の修正および作成を行い、授業実践を共有する。
- 授業公開を行うとともに、他校とのかかわり・つながりを意識した ESD シンポジウムを開催する。
- ESD を取り入れた成果を児童の学力のみならず、態度や実行力など多面的に評価し、教員の授業力、保護者の参加意欲、地域の活性化等も含め総合的に評価し発信する。

審査時の注目ポイント

なんといっても、カリキュラムデザインが実に魅力的ですね。教育課程に依拠しながらも、すべての教科・領域で ESD を展開しようと姿勢に感動しました。「つながり」「かかわり」を実現すべく、何をどうつなげ、どのように関わっていくか明確であり、あらゆる主体との協働が期待できます。(石丸先生)

学校情報

学校名 杉並区立西田小学校
 児童・生徒数 600名
 住所 〒167-0051
 東京都杉並区荻窪 1-38-15

TEL (03) 3392-6828
 FAX (03) 3393-7591
 E-MAIL ARAI-MASAAKI@city.suginami.lg.jp
 HP http://www.suginami-school.ed.jp/nishitashou

KEYWORD

防災学習 生物多様性
環境学習 国際理解学習

目黒区立五本木小学校

いのちのバトンをつなぐ ユネスコスクールの子

これまでの活動

ねらい (GOAL)

- **学びをつなげ、深め、広げる子どもの育成** (ESD の考え方を生かして・いのちのつながりを大切にする実践を通して・探求的、協働的な学びの充実を図る言語活動 (対話) の実践を通して)
- **学びや教室に特化しないホールスクールとしてのエッセンスをみんなで対話して創り出す**

活動内容 (ACTIVITY)

主に生活科や総合的な学習の時間を中心に、「対話」の実践を通じた探究・協働の学びの深まりを大切にしました。

1 年生

「なかよしだいさくせん」(地域保育園児との交流) :

「なかよくなるってどういうことだろう」という答えのない問いのもと、保育園児との交流の場を3回設定し、3回とも同じ園児と子どもたちとのグルーピングで、より相手意識をもてるようになり、4月にいよいよ新しい1年生としてお迎えの準備をしています。

2 年生

「とびだせ! 五本木たんけんたい」(地域の人たちと交流する活動) :

答えのない問い「五本木のまちのたからものはなんだろう」をもとに、豆腐屋・交番・祐天寺駅・花屋・ソーセージ屋・着物店・消防団他 19 か所のまち探検を活動の始まりとして、地域の人たちと関わることを通して、笑顔の秘密を探りました。

3 年生

「五本木の森の案内人になろう」(森を通していのちのつながりを感じ、考える) :

では「未来に続く五本木の森とはどんな森だろう」という答えのない問いをもとに取り組みました。五本木の森で遊んだり、言葉をもたない命に心を澄ませて森と対話したりしました。

4 年生

「ハピネス・プロジェクト」(インタビューや調査活動を通して街の未来のために自分達にできることを考える) :

答えのない問い「みんなが幸せに暮らせる五本木の街は、ど

んな街だろう」を基に取り組みました。自分たちの身近なコミュニティに目を向け、そこに暮らす人々の思いや願いを知り、自分たちにできることを考えました。街の清掃活動を始め、様々な行動につなげていきました。

5 年生

「食と命のバトンをつなぐ」(和食をテーマに追究活動を行い、食といのちのつながりについて考え、いただくいのちへの感謝の気持ちをもつ) :

答えのない問い「みんなが大好きになれる和食の魅力を、未来につなげるためにできることは何だろう。」を基に取り組みました。和食の料理人、栄養教諭などの和食従事者等、様々な人とのつながりを通して探究的な学びを深めていきました。給食の和食の残菜がぐっと減りました。

6 年生

「つながりで守る私たちの街・私たちの命」(自然災害) :

では「防災・減災において大切なことは何だろう。」を基に、1枚の避難所生活の写真を見るフォト・ランゲージの活動から学習が始まりました。消防署の方に「多発した火災をどう消火するのか」質問したところ「すべてを消火することは不可能です」と聞いて、改めて自分の身は自分で守ることに気が付きました。十分な調査や体験に裏付けられた課題に対するそれぞれの考えは、説得力をもつようになり、子どもたちは少しずつ自信をもって語れるようになっていきました。



変容 (TRANSFORMATION)

児童は答えのない問いを友だちと円卓を囲み対話をし、自分とは違う感じ方考え方と出会うことを楽しいと感じるようになった。教師も子どもの学びのプロセスの過程を大事にするようになった。

また、地域に出かけ教材を探し出したりするようになった。教師の価値変容が子どもの価値変容につながった。

これからの活動

■ 1 年目

五本木小4つのドアである環境・社会(経済)・交際理解・心とからだを切り口に探求的な学び、協働的な学びの単元構成を吟味し、ブラッシュアップを重ねていく。東京都の平成28年度「言語活動拠点校」として2月10日に研究発表(講師:永田佳之先生)都美術館「木々との対話」展における、作家と子ども達との対話を行い、未来の平和や持続可能性について考えていく。ホールスクールのエッセンスを対話を通して共創する。

■ 2 年目

これまでの研究や実践を生かし、ホールスクール(コミュニティ)としての核づくりを、みんなで対話をして決めていくこと。実践を通し考え行動していくこと、発信していくこと。またそれらを実現させる体制づくりを行っていく。校内分掌組織に「ユネスコスクールプロジェクトチーム」立ち上げ。

■ 3 年目

五本木小サステイナブルスクールとしての実践を、発信。2年目の実践のふりかえりと編み直しを行う。

審査時の注目ポイント

五本木小学校には〈中心〉がある。それは「五本木の森」と呼ばれる具象的かつ象徴的な〈中心〉だ。そこは、木陰に守られるように多様な生きとし生けるものが集う賑やかな場。この森を五本木小の教育活動の中心概念に喩えたと何になるのかなと思ひながら、申請書を読みました。サステイナブル・スクールとしての中心概念を当事者である皆さんで話し合っ共有し、その周囲に多様なチャレンジが守られながら展開されるような発展の仕方を期待します。(永田先生)

学校情報

学校名 目黒区立五本木小学校
 児童・生徒数 390名
 住所 〒153-0053
 東京都目黒区五本木 2-24-3

TEL (03) 3711-8494
 FAX (03) 3711-8420
 E-MAIL meghngeh@meguro.ed.jp
 HP http://www.meguro.ed.jp/meghngeh/

横浜市立永田台小学校

自分から世界へ発信する永田台

KEYWORD

その他 (ESD、ケア、もみじアプローチ)



これまでの活動

ねらい (GOAL)

「作る、できる、発表する」ことだけに満足することなく、「影響、変革、変容」を求める子どもの姿を目指す。

活動内容 (ACTIVITY)

■ 2009年よりCASIO 計算機若尾先生による「命の授業」をはじめ。

● 人、こと、ものとのつながりを意識し、自分たちがどのような立場にいるのかを考え、命の大切さや生命への感謝を感じることができた。そこから、自分がどのようなことを発信していきたいか考えるようになっていった。

■ 韓国の教員との交流を繰り返す。

● 日本の文化を伝えたりコミュニケーションをとることで、異文化交流を深めることができた。また、教員は韓国へ研修に行くことで、多様な考え方をもてるようになっていった。

■ 2009年より毎年エコプロダクツに出展。

● 自分たちが学習してきたことをもとに、多くの大人の方たちに臆せず自分の思いを伝えることができた。また、伝えるにとどまらず、会話のキャッチボールをすること

で、子どもたち自身がまた新たな課題を見付けることができていた。

～もみじアプローチでホールスクールアプローチに取り組んでいる～ (以下 例)

例1) 2010年より認知症キッズサポーターを実践する。

例2) 「いざ、鎌倉プロジェクト」

例3) 2013年より環境のための地球規模の学習および観測プログラム(グローブ) 推進事業に参加。

例4) SDGsについて研修を行い、教師がこれからの環境、社会、経済を考え授業実践に活かしていく。

★年間テーマを2015年は平和、2016年はエコとして全校で取り組んでいる。特に国連テーマに関心をもって実践にうつしている。今年度のエコ活動では、修学旅行や体験学習で、ごみを出さない、電気を無駄遣いしないなど教科の枠を越えて取り組んでいる。

変容 (TRANSFORMATION)

命の授業、また、命を中心とした授業研究をすすめていくことで児童が人、こと、ものを大切にしよう意識してきている。地域の方とも積極的に交流し、永田台のよさについての学年も思いをもっている。自分たちのふるさとである永田

台を大切に思う子どもたちが増え、地域をよくしていこうと、あいさつ運動を中心に活動を続けている。

このような取り組みは教師の変容から始まり、児童・地域社会の変容につながっていった。

これからの活動

■ 1年目 「伝える 集める 作る」 ～ESDを実践する学校のアイデアや情報を集める～

教師一人ひとりが安心して教育活動に取り組めるように、教

師間のケアリングを大切にしていく。また、日々の振り返りを共有することで、学校全体で子どもを見とれるようになっていく。その中で本気で取り組むことの大切さや子どもを本気

にさせるための手段を考え、多様な企業、NPO法人とのかわりや研修の中で、教師一人ひとりの学びを深めていく。これまでの教科学習や、教室での一斉学習の枠を越え、学び合い学習を中心にこれからの社会を担う子どもの育成に努めていく。また、地域版サステイナブルマップの作成を行い、学校と地域が手を取り合って子どもの育成を支援していきけるようにする。これらの実践を他校へ伝えたり、他校から集めたりすることでともに学び合いながらESDの実践を積み重ねていく。

■ 2年目 「伝える 共有する 作りほぐす」 ～実践を価値変容に高めるアプローチを作り、共有する～

1年目に行うことを引き続き継続していくとともに、教師一人ひとりが同じビジョンをもち、共通の価値観で子どもに接していきけるようにする。また教室環境だけでなく、職員室環境の整備、勤務時間の軽減に努め、教師が元気で子どもと接することができるようにしていく。研修・研究では、自校

の職員にとどまらず、他校の教師、他県の教師、企業の方・PTAなどを巻き込み、社会全体で子どもたちの育成に努めていくとともにその活動を共有し、ESD実践を作り上げていけるようにする。

■ 3年目 「共有する 成長し合う たしかめ合う」 ～近隣のESD実践校と共にアプローチを実践し、成長の変容をたしかめ合う～

振り返りをもとに教師の変容や子どもの変容を検証していく。教師や子どもだけでなく永田台サステイナブルマップ、地域版サステイナブルマップを見直し、よりよい学校や、よりよい地域はどのように構築されてきているのかを教師も子どもも認識できるようにし、今後の活動に活かしていきけるようにする。また2年間で積み重ねた実践から、子どもの変容を語り合い、自校に留まらず、各校で子どもの成長をたしかめ合う。その魅力をユネスコスクール以外の学校へもじわじわと広げられるようにする。

審査時の注目ポイント

横浜市立永田台小学校がサステイナブルスクールの活動で目指されていることには、変容と刷新性、汎用性が感じられます。それは、活動を通して、教師の変容や子どもの変容を検証しようとされていること。そして、永田台のサステイナブルマップと地域のサステイナブルマップを見直し、よりよい学校やよりよい地域はどのように構築されてきているのかを教師も子どもも認識できるようにしたいと考えられていることです。(市瀬先生)

学校情報

学校名 横浜市立永田台小学校
児童・生徒数 479名
住所 〒232-0075
神奈川県横浜市南区永田みなみ台6-1

TEL (045) 714-4277
FAX (045) 713-3631
HP <http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/nagatadai/>

新居浜市立惣開小学校

LOVE&SMILE! そうびらき つながる笑顔で まちがかわる

KEYWORD
防災学習 環境学習 人権学習
世界遺産や地域の文化財等に関する学習



これまでの活動

ねらい (GOAL)

自ら学び、自ら考え、持続可能な社会づくりに参画・貢献できる人材の育成

～学校と地域のパートナーシップを構築し、多様なステークホルダーとの協働による、
学校と地域をつなぐ ESD 活動を通して～

活動内容 (ACTIVITY)

《防災・減災》

●大規模災害が発生したと想定し、多様なステークホルダーと協働した大規模な合同総合防災訓練を実施した。参加者は988人。避難経路の確認、避難者受付、避難者の確認、炊き出し班、給水班、簡易担架班、簡易トイレ班、初期消火班、煙体験、起震車体験、土砂災害3Dシアター車、降雨体験、土嚢作成班、応急処置班、心肺蘇生班、手作り防災グッズ班など、学んだ実践的な防災スキルを生かし、防災リーダーとして大人と一緒に活動している。

《環境》

●愛媛県総合科学博物館と連携し、学校に隣接する里山にどのような植物や生き物が現存しているのか観察・調査活動を行い、環境に対する関心を高め、里山の豊かな緑、自然を愛する心を育てている。地域の山林を管理する方と連携し、カブトムシの幼虫を飼育箱で育て、里山に緑を増やし、カブトムシが住みやすい環境を作っている。
●愛媛県総合科学博物館と連携し、渡り蝶「アサギマダラ」が好むフジバカマ（「絶滅危惧」に移行する恐れのある種）

を植えて世話をし、アサギマダラにマーキングするなど、飛行ルートや生態を調査している。

《ふるさと》

●学校と地域のパートナーシップのもと、多様なステークホルダーと協働しながら、地域の伝統行事と子どもたちの学習の成果をコラボさせ、子どもも大人も、地域住民と一緒に楽しく集いながら、交流できる仕組みを作っている。
●地域学校協働本部、企業と連携して文化史跡のパフレットを作成、情報発信したり、児童がガイド役となり、文化史跡を案内する地域ウォークを実施したりするなど、児童が地域の文化づくりの担い手となるよう取り組んでいる。

《人権》～ESDを核にした人権教育の推進～

●民生委員さんと一緒に、地域の独居老人宅を訪問して、お赤飯を配ったり、老人福祉施設を訪問し、車いすを磨いたり、ボランティア活動を行っている。また、校区の幼稚園にも出かけて交流を深めている。

変容 (TRANSFORMATION)

●地域の人、もの、ことに関心をもち、つながろうとする態度が醸成されてきており、その中で、他者と協力したり、積極的にコミュニケーションを行ったりする態度が育て

きている。学校と地域がともに歩みながら、地域がつながり、地域が元気に、笑顔いっぱいの愛ある惣開のまちになってきた。

これからの活動

■1年目

多様なステークホルダーと協働し、より実践的な防災訓練にチャレンジ。絶滅危惧種のフジバカマを植えて、渡り蝶のアサギマダラを校庭に呼ぶ。カブトムシの幼虫を育て大きくし、里山にカブトムシが増えていくようにチャレンジ。子どもがガイド役となり、産業史跡を説明するなど、子どもが地域の文化づくりに貢献できる仕組みを作る。

■2年目

いざという時に、動けるお母さんたちを「防災女」として育て地域防災の自立連携を進めていく。アサギマダラが飛んで来た情報を、県内、国内外の学校と情報を共有しつながりを

作る。ペーパーレス化を推進する。学校全体のごみの減量化へつなげる。海外の学校への支援（資源回収収益金などの活用）を通して、国際理解を推進する。

■3年目

県内、国内外の学校と防災教育を通してつながっていくことで、世界が抱える環境問題、人権問題など、様々な問題に対しても、自分たちができることを考え、実践していけるように広げていく。ICTを活用して、アサギマダラに関するネットワークを広げ、つながっていくことで、日本、世界の自然の豊かさを守ることに広げていく。

審査時の注目ポイント

なんと、SDGsが教育活動にうまく組み込まれていますね。持続可能な地域づくりを目指した様々な主体との連携が明確です。新居浜市教育委員会のサポートもしっかりしており、多様なステークホルダーとの連携の仕方は他の学校にも参考になるのではないのでしょうか。(石丸先生)

学校情報

学校名 新居浜市立惣開小学校
児童・生徒数 321名
住所 〒792-0008
愛媛県新居浜市王子町1番3号

TEL (0897) 37-3401
FAX (0897) 37-3402
E-MAIL sobe-ad@esnet.ed.jp
HP http://sobiraki-e.esnet.ed.jp/cms/

KEYWORD

環境学習 国際理解学習 防災学習
地域の文化財学習 生物多様性

阿南市立桑野小学校

地域文化を継承し、未来を変える・未来をつくる児童の育成



これまでの活動

ねらい (GOAL)

- 1 地域での体験・交流活動を通して、ふるさと桑野のすばらしさに共感し、地域・世界の課題を直視し持続可能な社会をつくるために、課題解決に向かって積極的に行動できる児童を育成する。
- 2 未来像を予測して計画を立てる力、他者と積極的にコミュニケーションを行い協力する態度、つながりを尊重し、
- 3 多面的・総合的に考える力を養う。
- 4 学校が ESD の各種活動を積極的に発信し、外部団体との協働活動を推進し、持続可能な地域づくりに貢献する。
- 5 本校 ESD の理念を「コラボレーション」とし、各種領域の実践を充実させる。

活動内容 (ACTIVITY)

- 1 十数年前から地域の方が中心となり始めた、桑野地域全体で取り組む資源ゴミ回収 3R 推進活動を実施している。さらに、収益金で学校学習教材を購入し、ESD の視点に立った学習に活かしている。
- 2 2015 年からは徳島で活動する NPO 法人 TICO と連携し、途上国の現状の理解のためのワークショップを行った。本年度は、上記収益金でザンビアの分娩室改装プロジェクトに募金活動を行い支援することができた。
- 3 2016 年からユニクロ「届けよう、服のチカラプロジェクト」に参加し、高学年児童が中心となり活動をしている。子ども達がアイデアを出し地域の公共施設に協力依頼するための広報活動を実施した。その後、段ボール 30 箱を収集することができた。送付後は成果をレポートにまとめ、参観日には協力者に対して報告した。さらに、回収成果・学んだことをチラシにまとめ、徳島新聞に各家庭に配布して頂き成果を広報することができた。
- 4 NPO 法人 ACE、鳴門教育大学と協働しフェアトレード・パーム油プランテーションについて学び、途上国の児童労働の根絶、熱帯雨林の保護と生物多様性の尊重、途上国の子ども達に教育を普及させることの重要性を学ぶことができた。
- 5 生活科・総合的な学習の時間を中心に地域の高齢者・園児と積極的に交流する各種の活動を行っている。また、中学年は体験的防災学習を推進し、地域の防災リーダーとして活躍しなければならないという意識を育てることができた。

変容 (TRANSFORMATION)

- 1 学習者の変容
 - 具体的な実践を通じて教職員が ESD の理念を理解できるようになってきている。
 - 生活、総合的な学習の時間を中心にして「育てたい子ども像・育てたい学力等」を明確にして教科横断的なカリキュラムを編成し、指導ができるようになってきた。
 - 日々の学習指導が改善され、児童が思考・判断・表現するための言語活動の充実、ICT 活用による児童の情報収集力が高まった。
 - 学校だけでなく外部団体と連携して教育活動を行い、質の高い教育活動を行うことができた。
 - 全校児童が、よりよい地域、よりよい地球にするために行動しなければならないという意識が高くなっている。
 - ESD に関する内容を子どもが楽しく・興味深く学んでいる。

2 変容の理由

- より現実的なテーマを学習するようになったため。
- 外部講師の授業にふれ、指導方法の転換やより質の高い指導内容を提供できたため。
- 地域、保護者と一体となった活動を展開する中で教職員が ESD の必要性や育てたい力を認識することができたため。

これからの活動

■ 1 年目

2016 年度は、継続的に行われてきた資源ゴミ回収と NPO 法人 TICO の活動、ユニクロの活動をリンクさせる。地域の高齢者・園児と積極的に交流し、他者と交流することの楽しさ、他者を尊重した行動の大切さを認識する。

■ 2 年目

1 年目の活動を継続し、途上国の児童労働、非識字の実態を学ぶ、中国・韓国の小学校と交流し国際理解教育を推進する。

■ 3 年目

これまでの活動を継続し、国内外の子どもの貧困・非識字・教育内容を学び、多文化共存・人権尊重の視点から持続可能な社会を構築する必要性を学ぶ。

審査時の注目ポイント

ふるさと地域の人たちと一緒に資源ゴミを回収し、その収益金で複数の NPO 法人と連携して国際支援活動を行う小学校。そんなイベントが単発に終わらず、地域文化の継承＝環境＝人権＝国際理解＝消費者教育が、無理なくつながっていく。それをつないでいる中心にあるものは何だろうか。大イチョウの元気君の姿が目には浮かびます。(吉田先生)

学校情報

学校名	阿南市立桑野小学校	TEL	(0884) 26-0200
児童・生徒数	136 名	FAX	(0884) 26-1750
住所	〒 779-1402 徳島県阿南市桑野町岡元 40 の 1	E-MAIL	kuwanoha@mg.pikara.ne.jp
		HP	http://e-school.e-tokushima.or.jp/anand/es/kuwano/html/htdocs/?page_id=13

大牟田市立吉野小学校

みんなが安心みんなが笑顔で暮らすことができる社会を目指して

KEYWORD

生物多様性 世界遺産や世界遺産や
地域の文化財等に関する学習



これまでの活動

ねらい (GOAL)

みんなが安心して暮らすことのできるよりよい社会を構築していくために、持続可能な社会づくりに関わる課題を自らの問題として捉え、追究することを通して、考えを構築し、自分にできることを考え行動する子どもを育成する。

活動内容 (ACTIVITY)

大牟田市は、平成 23 年度に市内の全小・中・特別支援学校がユネスコスクールに加盟し、さらに平成 26 年度、「グローバル人材の育成に向けた ESD の推進事業」(文部科学省)において大牟田市教育委員会が採択され、大牟田市教育委員会が中核となって、福岡県教育委員会、福岡教育大学、地元企業・団体等の協力のもとコンソーシアムを形成し、グローバル人材の育成を目指している。

そのような中、本校では、平成 24 年度から、学習のテーマを「エネルギーを軸とした環境」「我が国の地域の文化・歴史等と外国の文化歴史等について理解を深める国際理解」「自分の命・成長や福祉について理解を深める^{いのち}生命」に重点化して生活科・総合的な学習の時間を中心に持続可能な開発のた

めの教育に取り組んできた。地域にある素材を ESD の視点に立って教材化を図ったり、全教科、全領域を通して横断的・総合的に学習を進めたりしてきた。その際、持続可能な社会の担い手として必要な能力や態度を育む活動を意図的に位置づけ指導を進めてきた。また、地域とのつながりや関わりを大切に、地域の方に助けて頂いたり、地域の方とともに同じ目標に向かって活動したり、「吉野小ユネスコフェスティバル」を開催して発信したりしてきた。さらに、他校との交流も積極的に行い、気仙沼市や奈良市、トルコやアメリカとの交流も積極的に進めてきた。

以上のようなことを可視化するためにストーリーマップを作成し、全職員で共通理解をしながら指導を進めてきた。

変容 (TRANSFORMATION)

子ども達は、自ら課題を見出したり、課題意識を連続・発展させたりしながら意欲的に追究したりすることができてきた。これらのことが、ESD で身に付けさせたい能力・態度の伸びにつながってきている。また、地域との「つながり」や「関わり」を大切に体験活動、ゲストティーチャーとの交流、情報の発信の場の工夫を行ってきたことで、自然の仕組みや地域の方の思いや願いに触れ、地域のことを大切に思い、よりよい地域になるように働きかけることができる子どもが増えてきている。

さらに、子ども達の継続した活動を通して、以前にも増して子ども達の活動を応援して下さる地域の方々が増えてきた。さらに、子ども達の活動を応援したり、協働で活動したりする「絆プロジェクト」が誕生し、子ども達も地域との結びつきを強めながら活動を進めることができてきた。活動を通して、子ども達は、地域の方々の温かさを実感するとともに、地域の行事に積極的に参加したり、よりよい地域のために行動したりする姿が多く見られるようになってきた。

これからの活動

子ども達のさらなる価値変容・行動変容につながるような実践をしていくためにホールスクールでの取り組みを推進していく。これまでの、指導と学習の領域を中心に ESD を推進してきたが、持続可能な担い手を育てていくために、子ども達が教室で学んだ価値観・ライフスタイル・行動と組織の矛盾を解消していきたい。そのために、校務分掌における組織の位置づけと運営の明確化を図るとともに、設備・運営面に

においても学校のシンボルとなるグリーンゾーンを充実させたり、組織全体でごみの減少やリサイクルの取組の充実を図ったりしていきたい。さらに、これまで作り上げてきた地域との連携のさらなる充実を図り、子ども達との協働学習やユネスコスクールフェスティバル等での発信活動を充実させ、持続可能な社会の実現に向けて地域と協働で取り組んでいきたい。また、他校との交流も積極的に進めていく。

審査時の注目ポイント

申請書を読んでいて吉野小学校には ESD で重視されている〈変容〉が大いに起こる潜在的な可能性を感じました。実際に観察池が「生き生きビオトープ」に変容したことに象徴されるように、カリキュラムや学校マネジメントも「生き生き」としたものと変容していく可能性に満ち溢れている。そのためにも、皆さんで決めた吉野小ならではのコア概念を中心軸にして、どこを切っても持続可能性が見えてくる実践に果敢にチャレンジして下さい！（永田先生）

学校情報

学校名 大牟田市立吉野小学校
児童・生徒数 420 名
住所 〒 837-0912
福岡県大牟田市大字白銀 967 番地 17

TEL (0944) 58-1037
FAX (0944) 58-7990
E-MAIL yoshihiro-402@st.city.omuta.fukuoka.jp
HP http://www.e-net21.city.omuta.fukuoka.jp/yoshino-es/

石巻市立牡鹿中学校

地域貢献活動「笑顔創造プロジェクト (ESP)」

これまでの活動

ねらい (GOAL)

持続可能な開発のための教育 (ESD) を推進するために、本校の「笑顔創造プロジェクト(ESP)」の活動目標として、次の3点を立てた。

- 1 牡鹿中学校の伝統芸能である「侍ソーラン」を披露し、地域住民に笑顔と元気を与え、地域の方々との触れ合いを通して「他と交流し学ぶ力」を育成する。
- 2 学区内の各施設や網地島白浜海岸の清掃活動を行い、観光地「牡鹿半島」の自然を守るとともに、地域の文化・
- 環境・伝統を継承することで、地域開発と自然愛護への意識と意欲の向上を図る。
- 3 地域の地場産業を知り、体験することで、自らの進路を開拓し、地域の復興と発展に貢献する意欲と態度を育成する。

活動内容 (ACTIVITY)

平成28年に「笑顔創造プロジェクト(ESP)」として総合的な学習の時間に行った活動内容は以下の通りである。

- 1 地域貢献活動 (6月)
学区内に分かれて自分たちの住む地域の清掃活動を行った後に、仮設住宅や福祉施設において「侍ソーラン」を披露し、地域住民に笑顔と元気を与えた。
- 2 網地島白浜海水浴場清掃 (7月)
網地島の白浜海水浴場の清掃活動を海開き前に行い、地域の復興や活性化に取り組もうとする心情を育てた。また、清掃活動後に「侍ソーラン」を披露し、網地島の住民に笑顔と元気を与えた。
- 3 牡鹿鯨まつり清掃活動 (8月)
地域の伝統的な祭りである鯨まつりに参加し、会場周辺の清掃活動と「侍ソーラン」の披露を行い、地域の復興や活性化に取り組もうとする心情を育てた。
- 4 職場体験学習
地域の地場産業を知り、体験することで、自分の将来の職業について考える機会を持った。
- 5 クリスマスドリーム (11月)
牡鹿中学校区の小・中学生の交流会 (クリスマスドリーム) において、各学校の代表児童生徒が職場体験学習等で学んだことを発表した。また、全校合唱の発表や「侍ソーラン」の披露を通して、小学生や保護者に笑顔と元気を与えた。
- 6 スマイルカレンダー作成 (12月)
地域住民の笑顔の写真を集めて作成した「スマイルカレンダー」を地域住民に配布し、地域住民に元気と笑顔を与えた。

変容 (TRANSFORMATION)

ESDによる地域貢献活動「笑顔創造プロジェクト(ESP)」に生徒が取り組んだことで、下記の2点の活動効果があった。

- 1 この活動を生徒会が企画し、継続していることで、身の回りの環境美化に努め、牡鹿の自然を大切にしようとする意識の高まりが見られた。
- 2 各学年で地域での職場訪問や職場体験学習を実施することで、地域の産業について知り、興味を持ち、将来の職業について考えることができた。



これからの活動

これまでの本校のESDの主な取組として、

- 1 牡鹿地区事業所周辺の清掃活動と侍ソーランの披露
- 2 網地島白浜海水浴場の清掃と侍ソーランの披露
- 3 地域の産業を学習する職場見学の実施
- 4 地域の夏祭り「鯨まつり」での清掃活動と侍ソーラン披露
- 5 クリスマスドリーム、夢と志講演会の実施
- 6 スマイルカレンダーの作成と地区内配布
- 7 情報発信の構築 (ホームページ) を行ってきた。

これまで取り組んできた活動を継続しながら、サステナブルスクールとしての活動のねらいの達成を目指して、各活動を発展させていく。

■ 1年目 (平成28年度)

地域の産業を学習する職場見学や体験活動に全校で取り組む。今年度は、鯨の水揚げ見学や鯨の歯の工芸品づくり、地域で取れた魚を使った料理教室などを実施した。

■ 2年目 (平成29年度)

南三陸金華山国定公園に属する牡鹿半島内の公園や海岸などの清掃活動に全校生徒で取り組む。網地島白浜海水浴場や御番所公園の清掃などを予定している。

■ 3年目 (平成30年度)

牡鹿中学校がサステナブルスクールとして取り組んだESDの活動を広く地域に発信するために実践発表会 (ESD公開) を開催する予定である。

審査時の注目ポイント

なんといっても、持続可能な地域づくりとともに、中学生の成長目標を見据えている点が画期的ですね。自己有用感を高めるESDの実践によってのキャリア教育への貢献が期待できます。地域特性を生かした包括的取組によって生徒の自己変容は確実になるでしょう。(石丸先生)

学校情報

学校名	石巻市立牡鹿中学校	TEL	(0225) 45-3117
児童・生徒数	47名	FAX	(0255) 45-3603
住所	〒986-2523 宮城県石巻市鮎川浜鬼形山 1-24	E-MAIL	jhsoshicl@city.ishinomaki.lg.jp
		HP	http://www.mediaship.ne.jp/~jhsoshi/info.html

大田区立大森第六中学校

「地域は屋根のない学校」から始まったESD推進及び授業改善

KEYWORD

防災学習 生物多様性
環境学習 国際理解学習



これまでの活動

ねらい (GOAL)

生徒が持続可能な社会の担い手になる

活動内容 (ACTIVITY)

1 授業改善を課題とした研究

1) 授業内での取組

ESDで身に付けさせたい力や態度について、教員アンケートや協議、ESDで身に付けさせたい力(国立教育政策研究所が7点例示)を参考に3つに分類、その後分科会を実施した。分科会は「思考力分科会」、「コミュニケーション分科会」、「ESDの態度」の3つで、年1回の提案・実験授業を行い、分析・改善のための提案等を行うとともに授業改善を行った。28年度は、ESDで伸ばしたい7つの力と態度に細分化し、9つの能力と態度のルーブリック化、ポートフォリオを活用し授業改善をおこなった。

2) 授業以外での取組

主に、「人とのつながり」「命とのつながり」「環境とのつながり」「地域とのつながり」「世界とのつながり」「国内とのつながり」等、「つながり」をキーワードに進めた。

2 具体的な研究活動

1) 授業内での取組

●「思考力分科会」では、「批判的に考える力」を「解決方法が一つではないことを意識し、協働してよりよい解決策を見出していく力」、「未来像を予想して計画を立てる力」を「より良い未来像を共有し、その実現のために必要なスキルやステップを考え実行していく力」、「多面的、総合的に考える力」を「情報共有をしながら、互いの考えの共通点や、相違点を理解し、共感・統合により課題を解決する力」と規定した。授業では、伸ばす力を明確にし、アクティブ・ラーニングを取り入れ、常時ESDで重視する態度(他者との協働、つながりの尊重、主体的な参加)を意識し、生徒が主体的に学ぶ授業づくりをおこなった。

●「コミュニケーション分科会」では、「発想力」「論理力」「聞く力」「批判的思考力」、前述4つの力を効果的に発揮できる「コミュニケーションを行う力」を研究した。

●「態度分科会」では、ESDにおいては「他者との協働」、「つながりの尊重」、「主体的な参加」を重視、育成することが問題解決能力につながると考えた。また求める生徒像を、異文化を拒まない、命を大切にする、積極的に関わるとした。「主体的・対話的で深い学び」を進めるため、認知的に不均衡な状態を引き起こす問題を、各単元や授業の「導入」で与えることが重要と考え実践した。

2) 授業以外での取組

●「人とのつながり」では、約5年間継続中の本校のボランティア団体による「大岡山駅前花壇メンテナンス」がある。

●「命とのつながり」では、校庭敷地内から防空壕が発見され、保存工事が完了した平成26年11月12日を「平和の日」とし、全校生徒で「平和の歌」を作詞・作曲、「平和の日」には全校合唱をする。約10年間、3学年に普通救命講習を実施、これまで1300名以上が技能認定証を授与された。

●「環境とのつながり」では、約7年間地域非営利団体等の協力を得て、洗足池で姿を消したホテルの自生・復活を目指す「ホテル復活プロジェクト」、エネルギー対策のためのグリーンカーテンを設置している。

●「地域とのつながり」では、自治会、消防団等と協力し避難所開設等を行う学校防災訓練を約7年間毎年実施。また地域住民と地域の危険箇所や防災資源等を点検する「まちなか点検」をおこなっている。

●「世界とのつながり」では、中国・韓国招へいプログラム、日米交流プログラム等への教員参加、ESD Foodプロジェクトでは国外3か国、国内等の学校とスカイプ等での交流、子供服を難民に送る活動、担当教師による新聞記事の紹介、全生徒が意見や感想を書く「世界のトピックス」等を行っている。

●「国内とのつながり」では、南三陸町との継続的な交流や、愛知県豊田市立中学校との生徒交流会等がある。

変容 (TRANSFORMATION)

学習者の変容としては、学習することに疑問を持たなくなった。学習することが当たり前で、その結果持続可能な社会が

開けてくることを学んでいる。実践者は生徒の変容ぶりに確信を持ち、更に変容することの大切さを知った。

これからの活動

■ 1年目

授業改善の振り返り

国立教育政策研究所教育課程の発表を踏まえ、2年間の授業改善で行った成果と課題をまとめ、紀要に残す。

■ 2年目

1年目の成果と課題を踏まえて、全国に発信できるように

ESDの評価をまとめる。ESDの推進拠点として、全国に発信できる物を更に研究していく。

■ 3年目

今までの実践と成果をまとめ、全国に発信する。ESDとは何かを改めて振り返り、国内の学校と交流し、より深い学びの実践報告ができるようにする。

審査時の注目ポイント

大田区立大森第六中学校は、都会の湧水・洗足池と風致協会、勝海舟別邸跡、校庭で発見された防空壕跡、地域の商店会、防災訓練等、ESDで結ばれた世界各国の友、自然と歴史と人々とのつながりに支えられ、教科等すべての教育活動の中で学び育つ元気な中学生、教科等を超越して授業改善を行う研修会で、新人・若手教員も学び育ち続ける学校です。(成田先生)

学校情報

学校名 大田区立大森第六中学校
児童・生徒数 383名
住所 〒145-0063
東京都大田区南千束 1-33-1

TEL (03) 3726-7155
FAX (03) 3726-7157
E-MAIL om6-j03@educet01.plala.or.jp
HP http://academic3.plala.or.jp/om6j/

名古屋国際中学校・高等学校

世界と日本の未来を担う国際人になるために

KEYWORD

国際理解学習 気候変動
環境学習 防災学習



これまでの活動

ねらい (GOAL)

社会の持続可能性を常に念頭に置きながら活動できる人物を育成し、社会へ輩出する教育機関を地域に増やす。それにより ESD 活動を拡大し、社会全体の子供達の持続可能性に対する意識水準を引き上げる。

活動内容 (ACTIVITY)

1 探究型のカリキュラムの展開

a SIA 特論の新設

(Sustainability in Action ! の略称)

持続可能な社会の実現に関するさまざまな社会課題をテーマに上げ、探究型の授業をする。グループディスカッション、レポート提出や意見交換を Web 上で実施、さらにプレゼンテーションなどの手法も学ぶことで、持続可能な社会の実現に向けて実践的な取り組みになり、多面的・多角的な視野の獲得につながった。

b 国際理解研修の多角化

イギリス・フランス・アメリカ・カナダ・フィリピン・オーストラリア・シンガポール・マレーシアの国際理解研修先においてフィールドワークや交流の場を設けた。一例として、フィリピン研修では認定 NPO 法人アイキャンの協力を得て、現地の子供達との交流により彼らの置かれる現状や貧困問題について解決策を考えた。

c 公募型活動 (授業外活動)

ESD 活動により深い興味関心がある生徒を集め、授業外活動として、さまざまな活動を企画・実践した。例えば、

フェアトレードを学習し、実際に商品を取り扱う Aoyagi Coffee Factory 社と共同で本校オリジナルデザインによる商品を開発、文化祭等で販売した。また、外国人への日本の災害理解の啓発を促す携帯用トイレ「かわやん」のデザインを (株) まいにち協力のもと考案した。

2 アライアンスパートナー (外部組織) との連携

大学・NPO 法人・民間企業など外部の組織と連携し、さまざまな分野の人々との交流を行った。その結果、グローバルな視点や文化の多様性などさまざまな素養の獲得につながり、より創造的な社会課題の解決の方法を考える機会となった。

3 多面的・多角的な授業と評価の実践

「テーマ設定→調査・分析→プレゼンテーション→評価」により、自ら学習成果をまとめ、情報発信した。

また、教員・生徒がテーマに関わるルーブリック評価を行い、評価をもとにしたフィードバックを実践した。

これからの活動

<カリキュラム>

SIA 特論、総合、外部講師による特別授業などの活動を体系化し、カリキュラムの完成を目指す。また、国際理解研修のフィールドワークで集積したデータを分析し、報告を行う。持続可能性に関する学習成果発表として、論文作成と報告会を実施する。

<外部連携>

名古屋商科大学や地元大学などで特別授業を実施。専門的な知識や手法の修得や大学生・大学院生との交流を通じ、自身

の将来像を描く機会を増やす。また、CSR 事業に触れる機会を設けることで、子供達が社会人となった後も社会の持続可能性を意識するように促す。

<サステナブルスクール基本方針策定>

気候変動に関する学習を深化させ、身近な対策を試験的に展開する。報告会を企画し、サステナブルスクール関係者及び大学・企業・NPO などとの実践報告及び持続可能な社会の実現のためのディスカッションを行う。

審査時の注目ポイント

[Sustainability in Action !] (略称 SIA) というキーワードで学校の ESD 活動全般を焦点づけて、「SIA 特論」という科目新設や国際理解フィールドワークの多角化などアクティブな探究型学習にチャレンジしている。サステナビリティ文化の形成を視野に入れ、英語力だけでない本来のグローバル教育の先進モデル開発を期待したい。(吉田先生)

変容 (TRANSFORMATION)

平成 26、27 年度、ESD 活動についてのアンケートを全生徒・全教員を対象に実施。ESD 活動の機会が増えたことにより、生徒自身の「社会課題の解決に向けた取り組みを行っている」という認識が増加。また、外部連携や外国語の必要性に関する

割合も高くなったことがわかった。このような変化は、自らの将来や現実世界での課題をより身近に感じる事が出来た証明であり、それは学校外の様々な分野に関わる方々との交流を通じて、より広い視野を獲得した結果といえる。

学校情報

学校名 名古屋国際中学校・高等学校
児童・生徒数 815 名
住所 〒466-0841
愛知県名古屋市昭和区広路本町 1-16

TEL (052) 858-2200
FAX (052) 853-5155
E-MAIL senior@nihs.ed.jp
HP http://www.nihs.ed.jp

KEYWORD

国際理解学習 その他（地域課題解決学習・生き方・在り方探究）

福山市立福山中・高等学校

グローバルな社会・地域社会で「夢を見つけ、はぐくみ、かなえる」



これまでの活動

ねらい (GOAL)

持続可能な社会の担い手に必要な知識、能力、態度、価値観の育成を目的として、(1)「地域課題解決プロジェクト」、(2)「国際課題解決プロジェクト」および、(3)「生き方・在り方探究プロジェクト」の3つを、総合的な学習の時間を中心に他教科や特別活動と関連付けながら実施する。

活動内容 (ACTIVITY)

「共生社会の実現」に向けて全校で3つの活動に取り組んでいます。「自分の力を発揮する活動」、「社会に参加する活動」、「社会に役立つ活動」です。

1 地域課題解決プロジェクト

実地見聞を伴う体験的な学習を通して、地域を知り、課題解決に取り組む基礎力を育成する。

①ふるさと学習 (中1、総合学習)

福山の歴史や資源、人々の営みについて、副読本を活用したり、地域に出かけたりして学習を深め、愛着と誇りを育てる。

②誰もが暮らしやすい福山の街づくり (中1、総合学習)

出身地域を中心に「暮らしやすい福山の街づくり」を考える。地域を訪れ、長所や課題を検討し解決策を提案する。

③職場体験学習 (中2、総合学習)

5日間の職場体験後には、レポートにまとめ冊子化し(体験先に届ける)発表会を行う。

④高校版「ふるさと学習」(高1、総合学習)

福山市の「次世代育成プロジェクト」の一環。地元の企業研究を行い、「高校生が作った『高校生のための企業ガイドブック』」を作成・発表し、地元で就労・貢献する人を育成する。

⑤課外活動や研究活動に挑戦 (高1～2年、課外活動)

夏休みの課題として、各種団体が実施する高校生議会や未来探究プロジェクト、ボランティア活動などに参加する。

2 国際課題解決プロジェクト

調査・発表を行い、海外修学旅行先や姉妹校と国際交流を行う。思考・解決・提案型の交流活動を行う。

①国際理解 (中3、総合学習)

調査国(地域)を決定し、衣装や発表用ポスターを使ってポスターセッション形式で発表を行う。

②海外修学旅行 (高2、総合学習)

修学旅行先のシンガポールとマレーシアに関する研修課題テ

マを設定する。調査した内容を冊子化しクラス発表を行う。

③姉妹校との国際交流 (希望者、課外活動)

夏休みに2週間オーストラリアへ、3月にはマウイ希望者が語学研修を行う。共通テーマで思考、提案したりする。

④海外ボランティア活動 (希望者、課外活動)

夏休みに文部科学省所管の社会教育団体SYDのプログラムに参加し、フィリピンのゴミ山で暮らす子どもたちを訪問する。

⑤模擬国連 (英語部等有志、特別活動)

国連会議をはじめとする国際会議のシミュレーションを行う。有志を募り夏休みから議題に関して調査活動始める。

3 生き方・在り方探究プロジェクト

長所や魅力を発見し自尊心を高め、講演等での学びを活かしてライフプランを設定し、よりよい「生き方・在り方」を考える。

①自分発見学習 (中1、総合学習)

小学校までの学習や活動(写真、賞状、認定書)から自分の魅力を発見し、ポートフォリオにファイルする。

②進路研究I「キャリア学習」(中3、総合学習)

中学3年次の東京修学旅行を生徒の力で運営するための取組。テーマに基づく学びをまとめプレゼンテーションを行う。

③進路研究II「ライフプラン」(高1、総合学習)

社会人講演会を実施し地域の人に「仕事インタビュー」を行う。夢や目標・方法を考えライフプランを設計し発表会を行う。

④進路研究III「課題研究」(高2、総合学習)

自己の進路や興味関心、現代社会で話題になっている問題や学問分野に関して、課題を設定し調査研究を行う。

変容 (TRANSFORMATION)

実践をESDの観点で体系的に整理することで、各活動の位置付けを認識できる。また、「調べ学習」「異文化交流」にと

どまらず、「思考」「探究」「パフォーマンス」「課題解決」まで進むことが期待される。

これからの活動

■1年目

実践をESDカレンダーに整理し、各活動が育む「資質・能力」を整理する。3つのプロジェクトの展開計画を立てる。海外の学校と相互に思考・探究する場を創る。次年度に始める「高校版ふるさと学習」の計画策定をする。

■2年目

新規プログラムを試行し、評価をとり、平成30年度以降のシラバス及び評価計画を作成する。公開研究会で指導助言を受ける。

■3年目

新シラバスで実践を行う。中学校1年・高等学校1年は新シラバスで、他学年は移行できるものから実践する。

審査時の注目ポイント

福山市立福山中・高等学校は、これまでオーストラリアや、韓国、マレーシアやハワイなど多くの海外の学校と「協働」してきました。福山の街づくりなどをテーマとした「地域課題解決プロジェクト」と国際交流にもとづく「国際課題解決プロジェクト」、自尊心や個人の魅力を見つける「生き方・在り方探究プロジェクト」の3つを中心としたホールスクールアプローチの推進に期待しています。(市瀬先生)

学校情報

学校名 福山市立福山中・高等学校
児童・生徒数 929名
住所 〒720-0843
広島県福山市赤坂町赤坂910

TEL (084) 951-5978
FAX (084) 951-6518
E-MAIL kou-ichifuku@edu.city.fukuyama.hiroshima.jp
HP http://www.edu.city.fukuyama.hiroshima.jp/kou-ichifuku/

KEYWORD

防災学習 生物多様性 気候変動 エネルギー学習
環境学習 国際理解学習 世界遺産や地域の
文化財等に関する学習 その他

静岡県立下田高等学校南伊豆分校

地域社会の将来を担う人材育成へ 今分校ができること



これまでの活動

ねらい (GOAL)

地域の活性化につながる活動を展開し、地域発展のために寄与できる人材を育成する。

活動内容 (ACTIVITY)

隣接するこども園との交流活動を科目「生物活用」に位置づけ、南伊豆分校において、農作物の栽培やその学習会を生徒が中心となり実施することを活動の柱に位置づけた。その他、地域の方のご協力の基に多くの活動を展開している。

変容 (TRANSFORMATION)

柱となる交流活動の平成 22 年度から平成 27 年度までの計画を以下のように立て、実施してきた。

プロジェクト長期計画

- I 期 園芸を活用した交流（平成 22～23 年度）
- II 期 園芸保育の実践活動（平成 24～25 年度）
- III 期 園芸活動による幼児教育効果（平成 26～27 年度）

【I 期・II 期報告】

1 交流の内容選定と試行【園芸を活用した交流内容の選定】

- <平成 22 年度>「幼稚園児（南伊豆幼稚園児 40 名）」との交流実施
- <平成 23 年度>交流内容の選定（南伊豆町立南崎保育園 対象 5 歳児 27 名）年間 10 回

2 『園芸保育』の実践活動（南伊豆認定こども園開園 対象 年長児 39 名）年間 12 回

- <平成 24 年度>認定こども園との連携を通じて、地元の子どもたちに農作物を育てることの魅力伝える。
- <平成 25 年度>『園芸保育』課題解決にむけた取組（対象 年長児 48 名）年間 12 回

3 課題とその解決に向けて

- <平成 25 年度>作物管理において農業使用が限定されるため害虫防除に大変な手間がかかり、有効対策が必要で害虫防除に効果があ

るものを探し、摘果キウイ果実の利用を検討。

4 園芸保育資材としての摘果果実の利用について

- <平成 25 年度> 農業のかわりに園芸保育資材として摘果したキウイ果実を利用

5 園芸保育活動推進について

- <平成 25 年度> 園芸保育の推進活動

【III 期活動報告】

年間をとおした「園芸保育」プログラムの効果を検証し改善を図る活動。

1 保護者アンケートによる改善

- <平成 26 年度> 交流園児 48 名の保護者全員にアンケートを実施し、一定の成果を感じることができた。

今後、より園児の発育に貢献できるプログラムを実施していけるかが課題。

2 最適園芸作物選定とその活動目的の達成を目指す。

- <平成 26～27 年度> 交流 24 回実施。「食育」など幼児の教育に役立てるため、伝える内容を明確化した活動。

- 1. トマト 栄養の劇を通じて、食わず嫌いを減らすことにつなげる。

- 2. キウイフルーツ 栽培はもちろん、加工に関する興味、関心を高める活動を行う。
- 3. ダイコン 根はもちろん、間引き菜の活用など無駄なく全てを活用し、食を大切にすることを伝える。

- <平成 27 年度> 作物をとおして地域の文化や歴史を知るプログラムの設定。
- 4. サツマイモ（紅・黄色）戦時中の貴重な食糧であったことなど、歴史的な背景を園児に伝える。

これからの活動

■ 1 年目

- 1 現在まで、幼児教育の専門家から見た「園芸保育」の評価方法が確立されていなかった。そのため、静岡大学教育学部の田宮縁教授とともに、評価方法を確立させていく。
- 2 地域との関わりや、学校・授業の中での活動を体系的に捉え、ホリスティックアプローチができるよう整理する。

■ 2 年目

- 1 1 年目で設定した評価方法を基に、年度当初より評価に照

- らし合わせて活動を実施し、評価する。
- 2 1 年目の活動を踏まえた上で、地域とのつながりの幅を広げる。
- 3 年目
- 1・2 年目で実施したことからさらに様々な地域資源を取り入れ、「南伊豆」、「園芸保育」を核として活性化させる方法を模索する。

審査時の注目ポイント

全校生徒 120 人余りの農業（園芸）の専門高校である下田高等学校南伊豆分校は自然豊かな環境にある一方で、高齢化率 40%以上という現実にも直面している。しかし、同分校は、日本の地方が直面する典型的な課題を好循環に転換していくアイデアと好奇心と実践力を内に秘めた実践校であると思いました。自らのエンパワーのためにも、ぜひ国際協働学習にもチャレンジして国境を越えた連帯を実感してほしい。Sand Watch 等はそうした転換のきっかけになるのでは、と思います！（永田先生）

学校情報

学校名	静岡県立下田高等学校南伊豆分校	TEL	(0558) 62-0103
児童・生徒数	117 名	FAX	(0558) 62-2799
住所	〒415-153 静岡県賀茂郡南伊豆町石井 58 番地	E-MAIL	minamiizu-b@edu.pref.shizuoka.jp
		HP	http://www.edu.pref.shizuoka.jp/minamiizu-b/home.nsf

KEYWORD

気候変動 エネルギー学習
環境学習 国際理解学習 その他

広島県立安古市高等学校

「頑張ることがかっこいい」を合言葉に、さらなる高みをめざす



これまでの活動

ねらい (GOAL)

- 1 自ら課題を見つけ、学び、考え、主体的に判断する。
- 2 問題を解決する資質や能力を育成する。
- 3 学び方やものの考え方を身に付ける。
- 4 問題の解決や探究活動に、主体的、創造的、協働的に取り組む
- 5 自己の在り方生き方を考える。

活動内容 (ACTIVITY)

- 1 新聞切抜き作品の作成を通して社会と出会い、大学の学部・学科調べやオープンキャンパス参加、読書会を通して学問と出会い、ステージ・リーディングを通して言葉と出会い、ディベート活動や小論文作成を通して現代社会と出会う。
- 2 戦後史探究やESDについて学ぶことを通して社会を探り、自分の未来予想図をイメージできるシナリオ作りを通して言葉を探り、同窓生の企業人等の講演参加や大学体感プログラムを通して学問を探り、学年ディベート大会を通して現代社会を探る。
- 3 地球規模の課題解決のためにSDGsを理解し、ミニ・ディスカッションを通して社会を見つめ、言葉を生かしたパネルディスカッションを通して具体的な解決策の提案と自己の在り方を探究する。

変容 (TRANSFORMATION)

各教科での学びを社会生活とつなげて、未来のために今自分たちが何をすればよいのかを考え行動する、あるいは、考え行動しようとする資質が身についてきた。

これからの活動

- 1年目
総合的な学習の時間の取組及びボランティア活動・部活動・学校行事を、「論理力と共感力の育成」という視点から整理し、本校の教育活動全体を1つのカリキュラムとしてつなげる。
- 総合的な学習の時間において、ESDを十分に理解することと、探究活動を行うことに重点を置き、1年次は探究活動の基礎的な知識・技能を徹底して身に付け、2年次は個人研究をグループの中で議論し内容を高めていきポスターセッションとして発表し、3年次はその研究を卒業論文としてまとめるという3年間の計画を立てる。
- ボランティア活動においては、課題先進地域である毘沙

門台地域の高齢化社会の課題を正確に把握し、年に3回、100名を超える本校生徒がよりニーズに合った地域清掃ボランティアを実施する。

- 2年目
地域及び校種を超えた連携を行う。
- 総合的な学習の時間において、「知の冒険」と名付けて、答えが用意されていない問題を設定し、自分なりに考察して答えを出し、他者に伝える一連の活動を行う。
- 1年次：ディベートを通して、論理力と共感力を鍛える。その際、議論することが目的ではなく、現状の課

題を見据え新しい取組をどのような形で取り入れていくことがより幸せになるのかという視点を養う。クラス対抗のディベートとともに、大学生と一緒にディベートを行うことで、これまでの考え方や価値観等をより発展させる。

- 2年次：探究活動のメインの学年とする。テーマを設定して研究計画書を完成し、論文を作成する。その内容を発表するためのポスターを作成し、ポスターセッションを行う。10名を1つのグループとして、常に個人の研究をグループ内で発表・議論し、より高みをめざした探究活動になるように協働して学ぶ。研究計画書の完成までの過程で、グループ協議の際に大学院生にも入ってもらい、自身の研究を発表するとともに質問に答えられる力をつける。ポスターセッションにおいては、大学の先生や大学院生、高校や中学校の先生方に参加してもらい、生徒が質疑応答できる力を身に付ける。

3年次：クラスディスカッション及びパネルディスカッションを通して、現代社会の諸課題とその解決策に向けての取組を発表する。その際、大学の先生や企業の方に来ていただき深く切り込んで指導していただく。

- 学校行事や部活動等においては、幼稚園への演劇訪問や、文化祭への地域の高齢者や小学生、中学生を招待し、地域の高齢者から日本の伝統文化を教えていただき小・中学生に伝授する。

- 3年目
総合的な学習の時間、教科、学校行事、国際交流、生徒会活動、部活動を、地球規模の課題を知り協働して解決する活動を通して論理力と共感力を育成するカリキュラムの完成年度として、PDCAサイクルを十分にやり、県内の小中高等学校及び地域・PTAを巻き込んで公開報告会を実施するとともに、更なるカリキュラム改善を行う。

審査時の注目ポイント

広島県立安古市高等学校は、従来まで行ってきた、ボランティア活動、部活動、学校行事を「論理力と共感力の育成」という視点からとらえなおし、ホールスクールとして、カリキュラムにまとめあげることが目標とされています。ステージリーディングやディベート、パネルディスカッションといった教育的手法を活用した、地域的課題である高齢者への働きかけやSDGsなどの地球的規模の課題への取組みに期待しています。(市瀬先生)

学校情報

学校名	広島県立安古市高等学校	TEL	(082) 879-4511
児童・生徒数	956名	FAX	(082) 879-4512
住所	〒731-0152 広島県広島市安佐南区 毘沙門台三丁目3番1号	E-MAIL	yasufuruichi-h@hiroshima-c.ed.jp
		HP	www.yasufuruichi-h.hiroshima-c.ed.jp

愛媛県立新居浜南高等学校

マインからマインドへ

KEYWORD

環境学習、国際理解学習、
世界遺産や地域の文化財等に
関する学習



これまでの活動

ねらい (GOAL)

別子銅山の近代化産業遺産を活かした「持続発展可能な地域づくり」

活動内容 (ACTIVITY)

- 1 地域の歴史や文化について学び、その魅力を調査・研究し、より深く理解することによって、シビックプライドを育む。
- 2 学んだことを様々な手段を駆使して、積極的な情報発信（イベントやワークショップ）を企画・運営することにより、市民にまちの特質やそのよさを伝え、まちの活性化を図るとともに、生徒の思考力や企画力、判断力を養い、ボランティア実践者としての行動力を身に付けさせる。
- 3 地域課題への取組を通して、自らの社会的役割を果たし、問題解決能力を身に付けさせると同時に社会に貢献し、ESD を担う人材を育成する。
- 4 学校・地域・企業・行政・市民団体などと連携し、「学びの絆サイクル（持続発展可能な地域づくりの学び）」の学習機会を創造する。

変容 (TRANSFORMATION)

別子銅山の近代化産業遺産について調査・研究を行い、ホームページの制作やガイドブックの作成、小中学生向けワークショップや一般市民向け学習講座の開催、産業遺産を巡るツアー企画や案内などを行い、その魅力を積極的に情報発信するとともに、地域振興に大きく貢献している。

若者が地域づくりに参画することで、その姿を見て大人が変わり、地域が変わっていく。それぞれの関わりの中で、「心と心の絆」＝「マインド（心）」が紡がれ、子どもからお年寄りまでみんながシビックプライドを高めながら成長し励まされている。まさにマイン（鉱山の学習）からマインド（心と心の交流）への広がりであり、その学びの輪は着実に拡大しつつある。そして、若者が地域について学び、次代へ語り継いでいくことへの期待は大変大きく、市内だけではなく、全国的に多くの方から注目、支持されている。

その学びの輪が、新居浜商工会議所主催によるご当地検定「とっておきの新居浜検定」として開始。さらに、市教育委員会が、市内小学5年生のふるさと学習資料「新居浜ものしり博士」を発刊。その学びを深めた6年生全員が市教委・商工会議所主催の「新居浜ものしり検定」を受験。また、中学校では「ふるさと学習」として別子銅山への登山学習が開

始され、その取り組みも5年となり、市内全ての中学生が別子銅山に登ったこととなる。

そのような高まりが、市内全ての小中学校のユネスコスクール登録申請につながり、平成26年度に認定を受けた。

新居浜市における別子銅山の近代化産業遺産の文化財登録（登録有形文化財8件）にも寄与した。

【学習者・実践者の変容】

- 自分に自信が持て、積極性が生まれた。
- 視野が広がり、周りが良く見え行動できるようになった。
- 困難なことに向き合う忍耐力と仲間と一緒に乗り越える楽しさを知った。
- 感謝の気持ちをより一層持てるようになった。
- 地元への強い愛着心と誇りが生まれた。
- ふるさとの歴史や文化を後世に残す使命感が生まれた。

【学習者・実践者の変容の要因】

- 高校生が、地域の関係機関連携の媒介役となったこと。
- 自分の変容（成長）を自分自身が実感できること。
- 他者の評価によって自己有用性を発見できたこと。

これからの活動

■ 1年目

- ユネスコ委員会の活動の充実
- ESD パスポートのさらなる活用
- 小中学校および公民館との連携による出前授業やフィールドワークの実施
- 愛媛県や新居浜市のイベント企画への参画と協働
- 別子銅山の産業遺産を紹介したガイドブックの作成（英訳付加）し、観光ボランティアガイド（外国語を含む）の実践による活用と検証
- ホールスクールの手法を用いて、ESD の観点に立った授業内容の計画

■ 2年目

- 石見銀山への現地視察研修

- 新居浜市や観光協会、住友グループ企業等との連携による別子銅山の産業遺産を巡るツアーを企画・運営
- 本校に新しい系列「地域共創」を設け、次年度実施に向けたカリキュラム作成等の準備

■ 3年目

- コミュニティスクール、オープンスクールとしての研究を行い、先進校への視察研修
- 「地域共創」系列の完成年度を向かえ、シビックプライドを磨き、語り継ぐ人材育成のための新授業カリキュラムを構築
- 高校生が地域と協働で「学びの絆サイクル」を循環させるための学習機会を創出

審査時の注目ポイント

愛媛県立新居浜南高等学校には、ユネスコ部の生徒たちが牽引車となって、今ここで歴史との対話を引き出す別子銅山・近代化産業遺産のフィールドワーク、外国の方々14か国111人を含む410人が集う新居浜グローバルパーティーへの参加など、時空間・人間（じんかん）をつなぐESDの対話的カリキュラムがあるのです。（成田先生）

学校情報

学校名 愛媛県立新居浜南高等学校
 児童・生徒数 353名
 住所 〒792-836
 新居浜市篠場町1番32号

TEL (0897) 43-6191
 FAX (0897) 44-7447
 E-MAIL niish-ad@esnet.ed.jp
 HP http://nihamaminami-h.esnet.ed.jp/

KEYWORD

防災学習 エネルギー学習
環境学習 国際理解学習



これまでの活動

ねらい (GOAL)

ビジネスコミュニケーション学科の進むべき方向性として「持続可能な社会への貢献」を掲げています。
この目標達成のために以下の3点を授業として取り組んでいます。

- 1 他大学との連携の推進 (例: 復興関連分野)
- 2 地域の復興に関連した科目の提供 (例: パブリックコミュニケーション)
- 3 ESD に関連した科目の提供 (例: 環境教育、持続可能な社会と経営)

活動内容 (ACTIVITY)

カリキュラムにおける取組として以下のような科目を実施します。

- 3年生 開発学入門
 - 4年生 開発学Ⅰ、開発学Ⅱ
 - 5年生 環境経済学、共生システム論
- これらに加えてスポット的に外部講師による講演会を実施する予定です。
本校では高校生の年齢から専門教育が可能であるため、持続可能な社会実現に関心のある学生に対して、高度な教育が可能となります。

変容 (TRANSFORMATION)

平成 28 年度に、進むべき方向性の一つに「持続可能な社会への貢献」を掲げ、文系学科であるビジネスコミュニケーション学科を改組しました。また、平成 29 年度に、工学系 4 学科 (機械システム工学科、電気電子システム工学科、化学・バイオ工学科、都市システム工学科) においても、「モノづくりと環境保全の調和に配慮し、持続可能な社会の発展に貢献できるエンジニア」を養成する人材像の一つに掲げ、改組します。全学的に ESD に取り組み、人や社会、環境に配慮できるエンジニア、ビジネススペシャリストを育成します。

これからの活動

■ 1 年目

ESD の必要性を学生に理解させる事業として、2 月 1 日に宮城教育大学附属国際理解教育センターの市瀬智紀教授を講師に招き、ESD の必要性和ホールスクールの概念について学ぶ講演会を開催しました。また、当講演会において、本校中村校長から、校長自身が代表幹事を務めるサステナブルキャンパス推進協議会 (CAS-Net JAPAN) のネットワークや大学等の各機関の取組を学びました。学生には、ホールスクールの観点から物事を具体的に捉える機会が提供できました。

■ 2 年目

本年度入学した学生が 2 年生になり講演会等により、持続

可能な開発について知識を持つようになります。これにあわせて「トビタテ! 留学 JAPAN 日本代表プログラム『地域人材コース』」を利用して海外の ESD に関する取組を学習させる予定です。「地域人材コース」は中核市レベルでは、いわき市、長岡市及び奈良市のみが認定された事業です。いわき市出身の学生を対象とした短期留学事業です。

■ 3 年目

この年度から「開発学入門」が実施されます。この年度に ESD に関心を持った学生が 4 年生以降から実施させるゼミナール及び卒業研究のテーマ選択をします。前年度の「地域人材コース」の経験を踏まえ、学生同士の交流会を実施して ESD への理解を深めさせます。

審査時の注目ポイント

今後 40 年に亘る廃炉プロセスは、誰かが担わなければならない。原発事故を経験した福島からの ESD。それが「廃炉人材の育成」という地元高専のミッションとともに語られる切実さ。「開発学」など科目新設を含むカリキュラム、サステナブルキャンパス構想など計画に具体性もある。応援し、世界に発信したいと思います。(吉田先生)

学校情報

学校名	独立行政法人国立高等専門学校機構 福島工業高等専門学校	TEL	(0246) 46-0705
学生数	1,102 名 (平成 28 年 4 月 1 日現在)	FAX	(0246) 46-0713
住所	〒970-8034 福島県いわき市平上荒川字長尾 30	E-MAIL	soumu@fukushima-nct.ac.jp
		HP	http://www.fukushima-nct.ac.jp/

KEYWORD

国際理解学習 防災学習
生物多様性 その他

千葉県立桜が丘特別支援学校

「つながろう」桜が丘から地域へ 世界へ そして 未来へと

これまでの活動

ねらい (GOAL)

- ◆他者を理解するとともに、相互に人格を認め合うことができる児童生徒を育む。
- ◆児童生徒が様々な人や異文化とのかかわりを通して経験や想いを分かち合い、夢をもって楽しみながら生きる姿をめざす。
- ◆「つたえること、つながること、ひろがること」の活動をととして共生社会の実現を目指す。

活動内容 (ACTIVITY)

本校で行われている学習はすべてがESDに関係する内容であると考えていて、「つながり」というキーワードでESDを捉えている。各教科領域等での取組はもちろんのこと、キャリア教育、道徳教育、食育等様々な活動で児童生徒の自立や社会参画を目指しながら、人、地域、社会、世界との「つながり」を大切にESDに取り組んでいる。ここではいくつかの取組を抜粋して紹介する。

1 各教科領域

- 理科……生物や植物についての学習のなかで、花粉管の伸長とウニの発生の様子をiPhone顕微鏡で撮影し、観察。この動画を日本の近隣の学校やアメリカの学校に送り、交流学习も実施。
- 食育……千葉でとれる食材である、鰯や落花生について栄養教諭と一緒に学習（千産千消）。毎月1回世界のごはんの日があり、給食で様々な国の料理を食べることができる。

2 交流学习

- 近隣校や居住地校との交流及び共同学習

小学部、中学部、高等部それぞれが近隣校との交流及び共同学習を行っている。ディベートをしたり、体育や音楽と一緒にいたりして、小学生同士、中学生同士、高校生同士がつながれる良い機会である。

●アメリカの高校との交流学习

We are the worldを歌い、1つのムービーを作成するという学習。日本人は英語を、アメリカ人は日本語を練習してそれぞれ歌った。アメリカの高校生たちによる動画や写真の編集によって、性別や国籍、障害の有無など多様性に富んだ世の中だけ、世界は一つなのだということを感じられるムービーが完成した。

3 千葉県高等学校ユネスコスクール連絡協議会

千葉県内のユネスコスクールに加盟している高等学校の集まり。高等部の生徒が、同年代の高校生と「持続可能な社会」「よりよい社会」について意見交換することで、生徒たちは自分の考えを伝えること、人の意見を聞くこと、話し合いをしてわかりあうことが大事だということを感じている。

変容 (TRANSFORMATION)

教職員がESDの概念を理解し、日々の授業の中で意識したり児童生徒たちに伝えていったりすることから始めた。ユネスコスクール2年目の28年度、ESDを新しいものと捉えるのではなく、今までも学校で取り組んでいたことをESDの視点で捉え直そうと職員会議で確認したり、分掌の係がそれぞれの学部で働きかけたりして、ESDの考え方が少しずつ職員の中に浸透してきていると感じる。教職員が意識できるようになってきたことで、児童生徒たちにも少しずつ伝

わってきている様子。千葉県高等学校ユネスコスクール連絡協議会に参加した生徒たちは、ESDへの意識が高まり、自ら「学校でESDを広めたい」「地域とつながる何かをしたい」「人とのつながりを大切にしたい」という発言がみられるようになった。共生社会の構築にむけて、まだまだ小さいが、小さな一歩を歩みだしたかなと感じるユネスコスクール2年目である。



これからの活動

■1年目

授業実践について各クラスでの取組を分掌係が取りまとめ、掲示し、校内での啓発へとつなげていきたい。また、千葉県高等学校ユネスコスクール連絡協議会での高校生同士のつながりを大切に、千葉県内でのネットワークも大切にして活動を継続させていきたい。

■2年目

児童生徒たちが「共生社会の構築」「持続可能な社会の構築」について自ら主体的に考え、行動できるようにしたい。また、

学校内だけでなく、地域の方とのつながりを大切にして、防災教育や清掃活動等を実施したいと考えている。また、事業推進委員の先生を招いてESDについての全体研修の実施や、国内のサステナブルスクール同士での学校間交流にも取り組みたい。

■3年目

関わる教員を広げるとともに、児童生徒たちの主体的な活動を大切に、学校全体で取り組んでいきたい。また、国内外のユネスコスクールや企業との連携、交流学习に取り組みたい。

審査時の注目ポイント

千葉県立桜が丘特別支援学校では、アメリカとの交流学习、近隣校や居住地校との交流・共同学習を中心とした学習と教科・領域等の学習とキャリア教育などのESD実践によって、子どもたちに深い〈主体変様〉が起こっています。それは多様な「つながり」に気づくホリスティックなカリキュラムがあったからにほかなりません。(成田先生)

学校情報

学校名 千葉県立桜が丘特別支援学校
 児童・生徒数 169名
 住所 〒264-0017
 千葉県千葉市若葉区加曽利町 1538

TEL (043) 231-1449
 FAX (043) 231-3069
 E-MAIL sakuragaoka-sh@chiba-c.ed.jp
 HP http://www.chiba-c.ed.jp/chibapref-sakuragaoka-sh/

愛知県立みあい特別支援学校

ESD と ICT でつながる社会、ひろがる豊かな心

KEYWORD
生物多様性
国際理解学習 その他



これまでの活動

ねらい (GOAL)

「共生社会の実現」

活動内容 (ACTIVITY)

「共生社会の実現」に向けて全校で三つの活動に取り組んでいます。「自分の力を発揮する活動」、「社会に参加する活動」、「社会に役立つ活動」です。

1 「自分の力を発揮する活動」

障害のある児童生徒が、自分のできることに一生懸命に取り組む姿を周囲の人々が知ることで、ありのままに相手を受け止める社会の形成につながると考えます。校内での活動としては、「全校で取り組む清掃活動」があります。清掃を通して、環境学習へ発展する力を養っています。

2 「社会に参加する活動」

小学部は岡崎市立緑丘小学校と、中学部は岡崎市立竜南中学校（ユネスコスクール）と、高等部は愛知県立岡崎工業高校と、学校間交流を行っています。児童生徒の居住地の小中学校の児童生徒との交流も行っています。地域交流として、中学部では、絵手紙交流を行っています。高等部園芸班は、地域の老人会の方々とさつまいもの苗植え、幼稚園児を招いて芋ほり、地域のボランティアの方々と学校花壇の整備を行っています。また、高等部では、地域の専門家を学校に招き、授業をサポートしていただいています。今

年度は、プロカメラマンによる写真撮影入門、清掃会社による清掃技術講習会を実施しました。アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクトに参加しました。ジャマイカの高等学校と協力して、大型絵画（1.5m×3.6m）を半分ずつ描いて一つの作品に仕上げました。

3 「社会に役立つ活動」

全校児童生徒でペットボトルキャップを集めています。高等部の作業学習や生徒会活動の時間にキャップの選別や汚れ落としを行い、途上国へワクチン代金を支援しています。年2回あいさつ運動実施期間を設け、生徒会役員による名鉄美合駅での立哨活動を行っています。赤い羽根共同募金では、校内での寄付金集めと文化祭での来校者への寄付を呼び掛けています。高等部の作業学習で、近隣の事業所（岡崎市高齢者センター、愛知県青年の家）の清掃活動を行っています。

変容 (TRANSFORMATION)

1 児童生徒が積極的な体験活動に取り組むことにより、いろいろな方々と触れ合い、社会体験の機会が増えてきました。それによって児童生徒の中にいろいろなことに自分から挑戦してみようという姿勢がみられてきました。

2 学校内の活動から学校外の活動へと広がりがみられ、児童生徒の自立や社会貢献へのつながりが強まってきました。

た。身近なことに目を向け、それを解決する経験をすることで徐々に社会への興味関心が出てきたと感じます。

3 本校児童生徒が校外に出て行くことで、地域の人や老人会、スーパーや店舗、公共交通機関の人々の理解が深まり、年々活動がしやすくなってきていると感じます。

これからの活動

1 年目

小中高12年間の継続・一貫した指導に反映させ、ESDの視点による学習活動を展開する。校内教職員対象のESD研修会（ESDの基礎、ホールスクールについて）を実施し、ESDの基礎及び本校の取組を共通理解する。

2 年目

ESD活動と道徳教育及びキャリア教育との関連を体系化する。校内ESD研修会を実施し、本校のESD活動を全教職員が熟知する。

3 年目

年間指導計画の定着と毎年のESD活動の見直し。12年間のキャリア教育の年間指導計画の作成、及び、ESD活動との関連を一覧表にし、本校のESD活動を定着させる。

審査時の注目ポイント

ESDの重要な概念のひとつにインクルージョン（包摂）がある。持続可能な社会づくりには、障がいをもつ児童や外国にルーツをもつ子ども達等のマイノリティの積極的な参画が欠かせないからである。実はこうした視点は日本ではまだ弱いと言わざるをえない。しかし、みあい特別支援学校で展開されている多様な活動は希望に溢れている、と申請書を読んで感じました。ぜひ元気なESD実践を通して、包摂的な社会の端緒をこの日本に開いていって下さい！（永田先生）

学校情報

学校名 愛知県立みあい特別支援学校
児童・生徒数 256名
住所 〒444-0802
愛知県岡崎市美合町並松1-51

TEL (0564) 57-0013
FAX (0564) 53-0034
E-MAIL miyai-toku@pref.aichi.lg.jp
HP http://www.miai-sh.aichi-c.ed.jp/

NPO 法人 東京賢治の学校 東京賢治シュタイナー学校

心からの学びと心からの喜び 真に自立した人間を育てるために

KEYWORD

生物多様性 エネルギー学習 環境学習
国際理解学習 世界遺産や地域の文化等に
関する学習 その他



これまでの活動

ねらい (GOAL)

- 1年から8年(小学1年生から中学2年生)の小学部、中学部においては、身近な自然を十分体感できる多摩川をフィールドにし、子どもの年齢に応じた体験活動を行う。
- これにより、児童・生徒の感覚が育まれる事、同時に充実した自然体験を積み重ねた児童生徒が、生活の基盤である自然環境に対して意識を持つことが出来るようになる。
- 小中学部での自然体験が基盤となって、高等部生徒(中学3年生から高校3年生)が、地球、大地、海洋について学びを深め、地球の生態系について持続可能な視点を持ち、考え、行動することができるようになる。

活動内容 (ACTIVITY)

- 1、2、3年生 年間を通して多摩川の河川敷に散歩でかける。季節に応じて、植物・昆虫・魚、に出会い、川での水遊びを十分行う。3年生では校庭の田んぼで米作りを行う。
- 4年生 郷土の学習で、多摩川の歴史、人々の暮らしを学ぶ。多摩川サイクリングに出かけ、広い範囲の川に触れる。
- 5、6年生 動物学(5年生)、植物学・鉱物学(6年生)の学びの中で、多摩川に住む様々な鳥、石についても学ぶ。
- 7、8年生 クリーン多摩川に参加する。
- 高等部(中学3年生から高校3年生まで)の生徒が、毎年、3週間ほどに渡る実習を行う。また、経済学、地理学、地学、歴史学、数学、化学、生物学など多岐にわたる内容に関して、ドイツから講師を招き、グローバルな観点からそれらを学ぶ。12年生では、ヨーロッパに赴き、現地のシュタイナー学校の生徒と交流し、芸術の発表を行う。

変容 (TRANSFORMATION)

■小中学部—1年生から8年生

本校の特色上、遠方から転居してきた児童も多い。多摩川で遊ぶことで、ここが楽しい遊び場所へと変わっていき、家庭でも多摩川で遊ぶ機会が増えている。土手の斜面、不安定な川底を歩くことで、児童の体幹がしっかりしてくる。この活動を通し多摩川と立川市が児童生徒の故郷になっていく。

■高等部—9年生から12年生

4回の実習によって、生徒達は机上の論理にとどまらず、そ

れを実践するために必要なことを学ぶ。考える基盤を形成するために全ての生徒が歴史・地理・地学・生物・化学・物理・数学・国語を学び、そして、最終学年で大きな3つの公演を経ることにより、これらを基盤として自分の人生の目標を見つけ出して社会に旅立っていく。毎年、卒業前の12年生のどっしりとした姿は、多くの保護者に感動を与えている。卒業生の中には、卒業論文で取り組んだテーマと関わった進路を選ぶ生徒も多い。

これからの活動

■小中学部での取り組み

学年ごとにそれぞれのカテゴリーの活動に取り組み、最終的に児童生徒は8年間をとおして「多摩川」についての学びを深めていくように進んでいく。毎年3種類のカテゴリーの活動が同時に並行して行われている。

【第1のステップ】 実体験をとおして多摩川にであう(1年生から3年生)

【第2のステップ】 学びをとおして多摩川とであう(4年生から6年生)

【第3のステップ】 多摩川へ貢献する(7、8年生)

■高等部では下記のような日程で計画が立てられています。

●1年目 高等部9年生—中3

活動I 『農業実習』 期間 9月第3週～10月第1週までの3週間

活動II 『地学』 期間 9月第1週～第2週の2週間

活動III 『近代史』 期間 5月第3週～第4週の2週間

●2年目 高等部10年生—高1

活動I 『職業実習』 期間 11月3週間

活動II 『地理学』 期間 9月第1週から第2週の2週間

●3年目 高等部11年生—高2

活動I 『社会福祉実習』 期間 9月第3週～10月第1週までの3週間

活動II 『経済学』 期間 9月第1週～第2週の2週間

活動III 『発生物学』 期間 2月2週～3週の2週間

●4年目 高等部12年生—高3

活動I 『自然観察実習』 期間 7月第3週の3日間

活動II 『卒業論文発表』 期日 7月第2週の土日

活動III 『ヨーロッパ美術旅行と海外オイリュトミー公演』 期間 11月第2週～第4週の3週間

活動IV 『卒業劇』 期日 1月末日

審査時の注目ポイント

東京賢治シュタイナー学校は宮澤賢治とルドルフ・シュタイナーの思想を根っこに持ち、保護者と教師がともにつくる学校です。カリキュラムの特色は、常に知と心と身体とのつながりのもと、子どもたちの学びの記録「エポックノート」が美しい作品となる「エポック授業」にあります。教育が芸術であることに気づかせてくれる学校です。(成田先生)

学校情報

学校名	NPO 法人 東京賢治の学校 東京賢治シュタイナー学校	TEL	(042) 523-7112
児童・生徒数	181名	FAX	(042) 523-7113
住所	〒191-0023 東京都立川市柴崎町 6-20-37	E-MAIL	teacher@tokyokenji-steiner.jp
		HP	http://www.tokyokenji-steiner.jp

特定非営利活動法人 横浜シュタイナー学園

お話と芸術に充たされた、子どもたちの本質に応える学び

KEYWORD

その他（暗示的な機関包括型アプローチによるオールラウンドESD）

これまでの活動

ねらい (GOAL)

ESDのテーマとして自己変容が挙げられるように、持続可能な社会を実現するためには教育自体が変わることが必要です。日々成長し続ける子どもたちを健康に育むためには、教育もまた命をもち、成長し続ける営みでありたいと思います。私たちのESDのゴールは、この生きたプロセスに宿る教育

のダイナミズムを大切に、学校の発展の段階ごとにやってくる課題を見誤らないように努め、それらの課題に適切に応えながら、成長発展する生きた教育をつくり続けていくことにあります。

活動内容 (ACTIVITY)

私たちはこれまで、横浜の地に、教育内容、運営スタイル、立ち上げ方、法的な位置づけ等々、すべてにおいて新しい学びの場をつくりあげることには力を注いできました。教育面では、学年ごとの成長発達の質的な変化への洞察に基づいた国際ヴァルドルフカリキュラムを日本文化にあわせて再編成し、学期ごとに教科間の連携をとりながら、縦軸（発達段階間の相関性）と横軸（教科間の相関性）の両面にわたる有機的な全体性を備えたESDを実現してきました。あわせて教授法においても、イメージ豊かなお話を用い、絵画、詩、歌、身体活動など、五感を働かせる芸術的な取り組みを授業全体に浸透させてきました。これらの取り組みは、ESDの重要な要素である「統合」と関わりをもっています。人という存在を統合するものは自我です。しかし子どもの自我はまだ柔らかで未熟な段階にあり、自己と世界を力強く統合していけるようになるためには、自我がその子の人格の隅々にまでしっかり根を張るところまで待つ必要があります。

す。その間、私たち教育者は、世界を、あらかじめ統合され、調和のとれたまとまりとして子どもたちに提供する助力者として立ちます。このような子どもの本質に応える手法が、物語や芸術を用いたアプローチということなのです。2015年、国連によってSDGsが採択されました。この持続可能性の「ゴール」は17の分野に細分化されています。そこに至るためには段階が必要です。子どもたちの成長の段階を見極めながら適切な時期に適切な課題を取り上げ、子どもたちの自我が世界の網の目のような諸事象に「わたしごと」として結び付いていけるよう、できるだけ豊かなイメージや心と感性を用いる芸術的な活動を整えること。そのような学びが、この世界における真理、秩序、倫理のもつ美しさに共感する感受性を整えます。このようにして、細分化されたSDGsに自由な意思によって結びつき、それらを力強く統合していける人格を育むことが、暗示的な機関包括型アプローチの真髄なのです。

変容 (TRANSFORMATION)

いま、毎年送り出す卒業生の姿を前にして、そこから静かな波のように伝わってくる彼らのESDマインドに、教職員も保護者もただ圧倒されています。その飾り気なく真っ直ぐな立ち姿は、彼らがこれから社会のなかで選択していくもの、

生み出していくもの、働きかけていくものが、世界の持続可能性増大に向けて方向付けられていることへの確信を抱かせるに十分です。



これからの活動

重点校事業の課題として私たちは、この教育のESD要素を整理して言語化、ビジュアル化し、社会に共有可能な材料として出版物などにまとめる目標を立てました。そのために、これまでの教育活動を継続発展させながらフィールドワーク等の課題活動を並行して実施していきます。また、重点校と

あわせて参加権をいただいた「地球規模の気候変動への機関包括型アプローチ」プロジェクトの視点からの取り組みをそこに加え、後者の取り組みについての良質な資料にもなるようなものに仕上げたいと考えています。お楽しみに！

審査時の注目ポイント

横浜シュタイナー学園は、国際ヴァルドルフカリキュラムを適用し、異なる発達段階間の相関性と教科間の相関性を組み合わせた有機的な全体性を備えたESDのモデルを作り上げられています。これは「統合」のモデルとなるでしょう。芸術や音楽、演劇、身体表現などの芸術的な創造力や表現力にも着目したいです。生徒の優れた資質や変容がどうして起こるのかを探求して、その成果をぜひ全国のみなさんに示してください。（市瀬先生）

学校情報

学校名	特定非営利活動法人 横浜シュタイナー学園	TEL	(045) 922-3107
児童・生徒数	110名	FAX	(045) 922-3107
住所	〒226-0016 神奈川県横浜市緑区霧が丘3-1-20	E-MAIL	jimu@yokohama-steiner.jp
		HP	https://yokohama-steiner.jp/

特定非営利活動法人 京田辺シュタイナー学校

体験を通じた芸術的な学びにより 内面からの ESD 実現をめざします。

KEYWORD

地域文化 生物多様性 環境学習
エネルギー 国際理解

これまでの活動

ねらい (GOAL)

ESD の精神が内側から湧き上がってくるような、豊かな日々の学びを目指します。そうした学びを重ねていくことで、子どもたちの内面が豊かに育まれることを目指します。

活動内容 (ACTIVITY)

- 1 本校では、日々の授業の中で ESD の総合的学習を実践しています。「エポック授業」と呼ばれる日々の授業時間では、国語、算数、地理、歴史、物理、天文などの教科を、1 時間 40 分の時間枠で 3～4 週間集中して学びます。そこには様々な実験や校外学習もふんだんに取り込まれ、知識だけに留まらない体験的な学びが大切にされます。また他分野、他学年での学びともつながってゆく「重層的な学び」を目指し、12 年間で「有機的連関をもった大きな学びが成就する」カリキュラム構成になっています。
- 2 低学年から音楽、手仕事、美術など手足を使う授業が多くあり、芸術的実践的な感性・感覚が育まれます。それらは高学年において、さらに高度な授業や、生徒グループによる話し合い・実践に結びつき、「自分は人と共に、世界を変えていくことができる」という「自信と信頼」に変容していきます。様々な日々の学びの積み重ねは、それ自身が ESD であり「自ら考え、行動する人間」「人とともに喜びをもって生きる人間」に育つことを目指し、日々の実践を重ねています。

変容 (TRANSFORMATION)

低学年から手足を使って実践的、芸術的に学ぶことで、知識に留まらない「イメージし、ものを作り出す力」が身につけていきます。またクラスの友人たちとの学びで、「人（世界）に対する信頼」や「自分に対する自信」が育まれていくと感じます。そのプロセス、歩みは子どもの数だけあり、一人ひとりがその子らしく育っていくのです。ゆっくり育まれる「その子らしさ」は 12 年次にいよいよ花開きます。卒業プロジェクトの作品や研究、発表する生徒の立ち姿を通して、私たちは「その子らしさ」が「凝縮された個性」へと変容したのをまざまざと感じ取ります。人と共に何かを成し遂げていく力

は、卒業演劇において花開きます。脚本や大道具小道具、衣装、演出などの作成は皆との話し合いのもと進められ、様々な力が舞台へと凝縮され、公演の日を迎えるのです。こうした学びを重ねた生徒たちは、「自分は何がしたいのか。どのように社会とつながっていくのか」という熱意や真摯さをもって、卒業後の日々を生きてゆきます。また教員や保護者が「子どもたちのすこやかな成長」を願い、学校運営に参画することも大切な学びであり、ここでの教育の基礎を成すものと考えます。



これからの活動

1 本校の「エポック授業」を ESD の視点で明確に捉えなおす。

【例】6 年生「鉱物学のエポック」の内容

- 水と鉱物の関係を体験する（岩石の循環～風化、運搬、堆積、鍾乳洞）
- カヌーで川の源流から下流、海までを辿る旅の実施（3 泊 4 日、和歌山 古座川）
- 鉱物標本作り（色々な場所で石を拾い、標本にする。また周りの環境と拾った石の関係を調べる）
- 地域の山々を構成する岩石とその地域の暮らしや産業との関わりを調べる。（京都 清水焼 京焼物、滋賀 信楽焼）など

2 地域との交流や融合を積極的に進め、地域に貢献する事業をすすめる。

【例】「生活・園芸」

京田辺は昔から竹の産地として有名だが、現在は整備されず、放置されている竹林が多い。高等部の園芸の授業では、地域の方々の竹林を、生徒たちが整備し、地域環境を美しくする授業を進めていく。また奈良東大寺の二月堂で行われる「竹送り」には本校の 4 年生が参加し京田辺の竹を奈良まで運ぶお手伝いをし、伝統行事に参加している。このような形で地域に生きる人々や文化に生徒が直接触れることで、その地域に生きるものとしての感覚を養っていきたい。

審査時の注目ポイント

なんといっても、これまでの活動実績に説得力ありますね。ホールスクールとしての学校の姿勢だけでなく、ホリスティックなカリキュラムや具体的な実践が明確に看取できます。小学校から培われてきたサステイナブルな価値観が高等部にも浸透し、職業観に反映することが楽しみです。（石丸先生）

学校情報

学校名 特定非営利活動法人
京田辺シュタイナー学校
児童・生徒数 262 名
住所 〒610-0332
京都府京田辺市興戸南鉾立 94

電話 (0774) 64-3158
FAX (0774) 64-3334
E-MAIL info@ktsg.jp
HP http://ktsg.jp/



これまでの活動

ねらい (GOAL)

持続可能な社会に向けて、私たちの学園では以下の目標を持ち、子どもたちを育む活動を行っています。

1 自分を大切に思うところを育む：

子どもの自己肯定感の形成、安心して自分を表現することができる場づくり。

2 他者を尊重するところを育む：

他者への思いやりを持ち、価値観や立場の異なる人への理解を育む機会を持つこと。

3 多角的に物事を考え行動する姿勢を育む：

既成の概念を鵜呑みにするのではなく、自分自身で考え判断し、行動すること。物事をつながりの中で捉え、多角的に問題解決を図ること。

4 民主的で持続可能な社会を担う市民性を育む：

主体的に問題に取り組む姿勢を育むこと、自分と意見が異なる人とも話し合いを通して双方が納得する案を出せること。また、そのような人たちと協働できる態度を育むこと。

活動内容 (ACTIVITY)

1 自分を大切に思うところを育む活動：

個別の学習計画作り、プロジェクト学習、研究発表会

2 他者を尊重するところを育む活動：

こども哲学、自由作文、共同プロジェクト

3 多角的に物事を考え行動する姿勢を育む活動：

テーマ学習（環境・平和・人権・市民性分野の学習）

4 民主的で持続可能な社会を担う市民性を育む活動：

全校集会（i. 全員参加のルールづくり、ii. 多数決ではなく、対話を通して合意形成を行う全校集会の運営）

変容 (TRANSFORMATION)

■ 学習における主体者意識の向上：

学習計画を子どもが立て、その計画に沿って個別に学習を行うことで自律的態度や、自分自身で選択することにより学習を進めることに自分で責任を持つという主体者意識が育まれていること。

■ 子どもたちにおける対話文化の醸成：

子ども同士のトラブルが起こった時、子どもたち自身が対話を通して問題解決を行っていることから、話し合いを行い自分達自身で解決の糸口をつかむことができるという経験が養われていること。また、子どもたちが自分の意見を表現することや、他者の意見を聞きあう時間を重ねてきたことで、学

校内には「みんな違って当たり前」という多様性を認める雰囲気醸成されていること。

■ 市民性意識の涵養：

テーマ学習では、身近な課題から地球規模の問題まで、子どもたちが体験を通して学び、自分自身で調べ、考える学習を行ってきました。その中で、「自分が何を選ぶかによって社会を変えることができる」というある女の子の発言がありました。子どもたちが社会の出来事について自分との繋がりを意識しながら考え、社会を構成している一員であるという市民性意識が養われてきていることを感じています。

これからの活動

■ 1年目

テーマ学習と対話の活動を発展させ、対立を対話で解決する「ピース・ダイアログ」学習を行います。

<目的> 対立を、対話を通して自分達自身で解決することを学習する。対話の手法を様々な学習分野で応用する。

<予定> 「ピース・ダイアログ」学習の初年度として、対話を学習や子どもたちの人間関係構築に、効果的に導入できるようにプログラムを整備しながら実践を行う。

■ 2年目

次年度以降は「ピース・ダイアログ」学習をもとに、社会や世界の様々な課題に対象を広げて取り組みます。

<目的> 世界の諸問題（貧困、飢餓、紛争など）に視点を広げ、どのような仕組みで起こるのかを学ぶ。また、このような社会や世界で起こる対立を、「ピース・ダイアログ」を

用いて解決できるかどうかを、子どもたちの視点から探り学習する。

<予定> 新たなテーマ領域を取り上げながら、初年度の取組みを振り返り、分析・改善することで本学習の深化を図る。

■ 3年目

「ピース・ダイアログ」学習を基盤に、国内・海外の学校とのつながりの中で実践し振り返り、継続して学びの質を高める活動を行います。

<目的> 学校の枠を超えて、持続可能で共生的な社会を実現する担い手の育成を行う。また、様々なセクターとのつながりを活かし、教育を通して社会の変容を目指す。

<予定> 国内・海外の学校と実践共有を行い、学びの相互研鑽を図る。教育現場以外の多様なセクターと協働し教育について考える機会を創出する。

審査時の注目ポイント

なんといっても、「主体的・対話的で深い学び」がESDで実践できそうですね。自主・自律と協同がプロジェクト学習に活かされそうです。多様なステークホルダーとの協働・連携とともに、シュタイナー教育の手法がESD実践で結実することを期待しています。（石丸先生）

学校情報

学校名	認定 NPO 法人 箕面こどもの森学園	TEL	(072) 735-7676
児童・生徒数	43 名	FAX	(072) 735-7676
住所	〒562-0032 大阪府箕面市小野原西 6-15-31	E-MAIL	info@kodomonono-mori.com
		HP	http://kodomonono-mori.com/



【寄稿】

サステイナブル・スクールの時代

—— 国際的な潮流と日本の課題 ——

聖心女子大学 教授 永田佳之

リーマンショック、東日本大震災、英国のEU離脱…今世紀に入ってから経済危機や自然災害などが絶えず、先の見えない時代状況が続いている。こうした不確実性の時代において、どのような教育が求められているのであろうか。

グローバル化の荒波を乗り越えていけるだけの問題解決力を身につけさせる教育、流暢に外国語を駆使して国際的に活躍する人材の育成、災害時でもしなやかに逞しく対応できるような判断力の育成など、その答えはさまざまである。

実際に、不確実性の時代に応える教育はこれまでも検討され、国際的な運動として展開されてきた。ESD（持続可能な開発のための教育）はその代表であると言ってよい。「国連ESDの10年」の中で生まれた宣言等を見ると、いかに「不確実性の時代」を意識した教育運動かが分かる。人類が、日常で感得できるまでになった気候変動や生物多様性の急速な損失などの危機的状況をしなやかに強く乗り越えていけるように、教育も変容していかねばならない——そんな意志が国境を超えて共有されてきたのである。

こうした国際的な教育運動の中でもユニークなのは、学校をまるごとESDにしよう、学校のどこを切っても持続可能性が見出せるような組織にしよう、というサステイナブル・スクールと称される運動である。一例をあげるなら、英国のブレア政権下ではじめられたサステイナブル・スクールの全国推進計画などが挙げられる。また、こうした

運動にも影響を与えてきた民間組織のWWF（世界自然保護基金）やFEE（国際環境教育基金）などの貢献も指摘されてよいであろう。

これらに共通するのは、持続可能な未来につながる学びをつくるのは、教室内で展開される授業のみならず、学校やコミュニティの在り方じたいを見直していくという指針である。校内の水や食、エネルギー、校舎・校庭、健康、交通（通学手段）、音、気候変動への対応、マイノリティの人々（障がい者や外国籍児童等）の参画と包摂（インクルージョン）、民主的統治（ガバナンス）、地域および国際とのつながり等々の学校生活を構成しているあらゆる要素を持続可能性という観点から見直していく試みが各国で展開されている。

さて、このような国際的な潮流と重ねて日本のESDの現状を見てみると、どうであろう。上記「10年」で明らかになった日本の学校におけるESD実践の優れたところは、総合的学習の時間などにおける質の高い授業実践である。これは、国際的にも評価されてきた。しかし、そうした授業で強調される価値観やライフスタイルが教室の一步外に出ると、学んだことと矛盾することばかりであるのに気づく生徒は少なくない。実際、教室でその大切さを教えている節水や節電からエシカル*な購入に至るまで、持続可能性という観点から学校を採点してみると、心許ない実践が多いのではないだろうか。

日本でこの点を意識した試みが体系的に展開され始めたのは、「10年」が終わってからであり、その先鞭をつけたのはユネスコ・アジア文化センター（ACCU）である。先見の明をもって招聘した英国のサステイナブル・スクール・アライアンスのアン・フィンレイソン氏や英国を代表するESD実践校であるアシュレイ校のリチャード・ダン校長によるセミナーを通していち早くホールスクール・アプローチの具体的な実践を紹介してきた。（詳細は、ACCU刊『これからのユネスコスクールを考えよう—ひろがり つながり ふかまるESD推進拠点、』や本書の第1章を参照）。

2016年度からは、日本ではじめて「サステイナブル・スクール」と銘打った事業「ESD重点校形成事業～輝け！サステイナブルスクール」がスタートし、全国から選ばれた24校がそれぞれの現場でチャレンジしている。

そのチャレンジをひと言で表すと、学校まるごとESD、つまり校内のどこを切り取ってもサステイナビリティが見えるような学校づくりである。日本での試みは始まったばかりであるが、各々にとってもユニークな24校の実践を通して、不確実性の時代に生きる学校のしなやかな舵取り力が育まれていく端緒が開かれていくことを願ってやまない。

* 「倫理的」「道徳的」という意味。よって、「エシカルな購入」とは、人権や環境に配慮した製品を意図的に選択し購入すること。



平成28年度 サステイナブルスクール 活動スケジュール

平成28年9月初旬
採択校決定

平成28年9月下旬
校長・教員対象研修会

各校より校長と本事業担当教員を含む2名以上の参加を呼びかけ、採択校の初顔合わせとなる研修会を開催しました。事業概要や今後の方向性を共有した後、事業推進委員による2つのワークショップを通じて、ESDとは何かを今一度深く振り返るとともに、学校全体でESDに取り組んでいくことの重要性を確認しました。ホールスクールアプローチを軸とした活動計画を考える機会となりました。

平成28年10月～
サステイナブルスクール同士の
自発的な交流

平成29年1月下旬
平成28年度活動共有会

9月の採択以降の取組についての活動共有会を開催しました。午前の全体会では、国連大学サステイナビリティ高等研究所（UNU-AIS）から Binaya Mishra 氏をお招きし、気候変動と教育の関係についてご講演いただきました。午後は二つの分科会に分かれて持続可能な学校文化や気候変動をテーマとしたブレインストーミングを実施し、様々なアイデアを共有しました。





【寄稿】

サステイナブルな スクール文化を育む

— 3つの取り組み —

大阪府立大学 副学長／教授 吉田敦彦

サステイナブルスクール第2回目の研修（「平成28年度活動共有会」、63頁参照）では、参加者のブレインストーミングから生まれた多岐にわたる課題やアクションプランを集約して、24校が共通して取り組めるアクションを探りました。各校の多様な実情を踏まえながら共通の取り組みを絞り込むのは容易でないことでしたが、さしあたり次の3つが浮上しました。

- A) わかるテーマ、自校のキーワード・キーフレーズづくり
- B) 地域とのつながり方・関わり方、地域から世界へ
- C) 先生も子どももやりたいことから出発する学校づくり

この3つ、あるいはそのうちのどれかに取り組んでみようということになりました。期せずしてこの3つは、ユネスコ本部が「気候変動をテーマにした機関包括型アプローチ実践プロジェクト」（次項参照）のファシリテーター用ガイドとして作成した冊子のホールスクール・アプローチ指針（図1：UNESCO 2017,p.3）に対応するものになっています。

まず、図の下段に、このアプローチが全体として育むものとして、「School culture of sustainability サステイナブルな学校文化」と記されていることに注目です。「スクール文化」とは、その学校に参加している人たちの行いや態度や信念を、意識的であれ無意識的であれ方向づけている価値観や行動様式で、それが、より持続可能な社会をつくりていく方向に変容していくとき、「サステイナブルなスクール文化」が育われます。

そのようなスクール文化を醸成するために、指針では、

「学校の組織運営」の領域（図の左上）でのアプローチが大切だとしています。それは、旧来のようなトップダウン式ではなく、学校コミュニティの様々なメンバー（校長・教員・児童生徒・保護者ら）が一緒になって（小さなグループ→大きなグループ）対話を重ね、自分の学校にとって鍵となる価値や行動を自分たち自身で言葉にしていくことから始まると記されています。まさに、私たちのA)「わかるテーマ、自校のキーワード・キーフレーズづくり」に対応します。

ホールスクール・アプローチ指針の「地域とのパートナーシップ」（図の右下）が、私たちのB)に対応します。そこで強調されているのは、各学校が位置している地域の風土

図1 ホールスクール・アプローチ指針



サステイナブルなスクール文化

や歴史を踏まえ、その内発的発展のプロセスを大切にすることです。また地域で活動するNPOや行政、職業人・専門家等との開かれたつながりが推奨されています。

私たちのC)は、「教授と学習」（図の右上）にも「学校環境づくり」（左下）にも対応します。私たちが焦点を当てたのは、生徒が「やらされている」のではなく「やりたい」と思って学べるには、先生自身がそう思えることが大切だという学びの原点でした。その活動自体を楽しみ、喜びを

感じるからこそ、アクティブに持続していくことができます。

文化を耕すことは、即席でできるものではないですが、この学校の文化になったな、と言えるところまで培われはじめて、本物の、持続可能な文化になることでしょう。各学校の中でも、そして24校のサステイナブルスクールのあいだでも、長い目で「サステイナブルスクール文化」を育てていければと思います。

気候変動をテーマにしたホールスクールアプローチ実践プロジェクト始動！



Cours Sainte Marie de Hann学校視察にて（生徒が発案したグリーンウォール）



セネガル共和国ダカールで開催された国際ファシリテーター研修にて

2016年9月から、10校のサステイナブルスクールが気候変動をテーマとしたUNESCOのフラッグシッププロジェクトに参加しています。11月には2名の教員と1名のACCU職員が、セネガル共和国で開催された国際ファシリテーター研修において、世界12か国から集まった教職員および各国ナショナル・コーディネーターと共に、ホールスクールアプローチと気候変動に関する学びを深めました。2017年1月にはプロジェクト参加校を対象とした国内研修を「平成28年度活動共有会」内において実施し、いよいよ各学校による取り組みが始動します。



今後、2018年3月のプロジェクト完了まで、「ホールスクールアプローチ」のキーワードの下、参加校がそれぞれの特色を生かしたアクションプランを策定し、気候変動という地球規模の課題へ向けた学校・地域レベルの取り組みを実践していきます。また、プロジェクト参加校間の交流や学習会などでの学びの機会を通じて、学校そのものの在り方が変容していくことを目指しています。



サステイナブルスクール交流便り

9月からESD重点校形成事業～輝け！サステイナブルスクール～が開始して以来、各校から様々なご報告をいただいております。学校間で交流を始めたり、事業推進委員の先生方が各校を訪問したりと、その方法は様々です。このような交流から、これまで気がつかなかった自校の魅力を再発見し、その気づきをESD推進の次への一歩として活かしている学校が多くあります。サステイナブルスクールへの認定、交流を通して何か変化はあったのでしょうか。その中でも今回は、サステイナブルスクール発足以来、学校間交流、事業推進委員の招へいの両方を実現した学校、阿南市立桑野小学校を紹介します。



武田校長先生



阿南市立桑野小学校に関して簡単な紹介をお願いします。

学校に来ると最初に目に入るのが運動場の真ん中にある大きなイチョウの木(樹齢約140年:愛称「元気くん」)です。外部から来た人は、「授業のじまにならないのかな」と思います。しかし、「元気くん」は四季折々の風景を私たちに与えてくれています。春には新緑を、夏には人にやさしい木陰を、秋には見事な黄金色の景色を、冬には寒さに耐えて春を待つ強さを。子どもたちも保護者も「元気くん」は自分の生活環境の一部です。さらに、学校の周りは小高い山に囲まれ自然豊かな地域に位置します。ESDを推進す

るには最適な環境です。地域の方・保護者は穏やかで勤勉、そして、常に学校を中心に考え協力的です。子どもたちも、礼儀正しく、穏やかで勤勉です。しかし、遠慮がちで自己表現をあまり得意としない子どもたちです。

先生とESDとの出会いについて教えてください。

私とESDの本格的な出会いは2012年ESD日米教員交流プログラム¹への参加です。さらに、ESDについてより深く考えるようになったのは、2014年韓国政府日本教職員招へいプログラム²への参加です。このプログラムのグ

ループリダーとして最終日前夜にメンバー全員で夜遅くまで議論し報告書を仕上げたからです。韓国から帰国後は、私自身の研究のフィールドとしていた総合的な学習の時間について、副校長として校内の生活科・総合的な学習の時間のカリキュラムをESDの視点で再構成し、学級担任と共に実践を始めました。3つのステージで出会った人々の強い影響を受けてESDの認識が深まったように感じます。

サステイナブルスクールになってから何か変化はありましたか？

私が何よりも大切にするようになったことが地域文化の理解、学校をサポートしてくれる地域の方との交流です。そして、地域の方に「桑野のよさ」「桑野への私の願い」をより積極的に伝えるようになりました。地球規模の課題を考える原点は地域にあるということを再認識しました。これと同時に並行的に保護者・地域の方が今まで以上に教育活動に積極的に関わってくださるようになりました。

私の朝会や集会の話もESDをテーマにした内容になり、朝会で私が提示した課題を各学級で探究的に学習しています。多くの子どもたちが、その学びが楽しかったことを校長室に伝えに来てくれます。

教職員は教科書や前年度までの実践にとらわれず、子どもに育てたい資質・能力を明確にして、自由な発想で単元を創ってもいいのだと考えることができるようになりました。さらに、開かれた教育課程を創るのに消極的だった教職員が地域での体験・交流学习の重要性を体感してきています。子どもたちは、多様な人・文化と出会い、楽しく・創造的に学習活動に参加できるようになり、自己表現することに少し自信をもつことができました。さらに、どの学年の子どもも、自分と友達、地域、徳島県、世界とのつながりを感じることができるようになっていきます。

交流を通して再発見した自校の魅力はありますか？

運動場の真ん中にあるイチョウの木(元気くん)の存在の偉大さです。元気くんは、4世代の地域住民から愛され、

地域住民を見守り、自然保護の象徴的な存在であることを再認識することができました。今まで存在することが当然と思っていた、校内の購買(高学年児童が運営し児童が文具等を自由に購入できる店)の存在、田園風景、神社・お寺、地域に伝わる伝統文化の素晴らしさを再発見することができました。さらに、学校にボランティアで関わってくれている人々がさらに教育の幅を広げ、質を高めてくれる可能性を秘めていることです。

交流の魅力について教えてください。

横浜市永田台小学校での本校教職員の学び、さらに、同校住田校長先生、聖心女子大学の永田先生の来校は、本校教職員の教育哲学・教育内容等に関して視野を広げる絶好の機会になりました。徳島県内の研修経験しかない教職員がESDという新しいテーマについて研修できたことは刺激的でした。多くの教職員が自分の価値観をゆさぶられる貴重な体験だったと話しています。次は子ども同士の交流に向けてスタートです。子どもの価値が変容し、他者とのつながりをより強く感じることができると確信しています。

この冊子を手にとされるすべての方々にメッセージをお願いします。

ESDに出会って私自身が人として価値変容ができつつあります。未来を悲観的に考えなくなりました。地域文化の発信地である学校が、目指すべき地域像を明確にして協働して課題に取り組めば地域を変えることができるという確信があります。若い教師は、こんなことにチャレンジしてもいいのだという既成の枠を外して多様な実践を始めようとしています。ESDは子どもにとっても魅力ある楽しい学びです。楽しいから学び、学びの成功体験が自信になり、行動化できるという好循環をつくります。地域の身近な課題を子どもと共に多様な人・各種団体等と体験・交流を通して協働して楽しく学ぶことがポイントだと思います。よりよい明日(アース)のために、新しい価値を創造するためにみんなでチャレンジしませんか。

¹ ACCUがフルブライト・ジャパン(日米教育委員会)の委託を受けて実施した交流プログラム。ESDを共通のテーマとし、日米間で教員の相互交流、意見交換、共同研究を行うことにより、日米の教育交流とESDの推進を図ることを目的とする。

² ACCUが国際連合大学の委託を受けて実施している教職員交流プログラム。ESDや地球市民教育(GESD)を通して日韓の相互理解と友好発展を図ることを目的とする。

【特集】

学びの中心にESDを据えよう

～イギリスアシュレー校の取組から見えるもの～

2016年11月19日に東京にて国際ワークショップが実施されました。昨年度は、イギリスからアン・フィンレイソン (Ann Finlayson) 氏 (持続可能性と環境教育SEEd事務局長) をお招きし、「ESDとホールスクールアプローチ」というテーマでお話いただきました¹。今年度は、同じくイギリスから Ashley Primary School (以下、アシュレー校) 校長のリチャード・ダン (Richard Dunne) 氏をお招きし、「学びの中心にESDを据えよう」というテーマでお話いただきました。

当日は、国内外から約60名の先生方が集まり、リチャード校長のお話に熱心に耳を傾けていました。リチャード校長ご自身が世界の様々な課題に関心と強い探究心を持って暮らしています。リチャード校長の学ぶ力はどこから生まれるのか、アシュレー校はどのような学校なのか、学校ではどのような実践をされているのか、ワークショップの様子を簡単にまとめました。当センター職員との対談も合わせてぜひご覧ください。



アシュレー校ってどんな学校？

アシュレー校はイギリスのサリー州にある公立校で、4～11歳の子どもたちが通っています。アシュレー校では、学校を地域のための「学校」として位置づけています。したがって、日頃の学びを校内での学習として留めることなく、地域の持続性のための重要な発信源として地域住民も巻き込んだ実践に取り組んでいます。その成果は、イギリス国内に留まらず世界中で認められつつあります。



このようなエコスクール²推進校としての取組が評価され、2009年からは、主にエネルギーや食を中心とした賞を数多く受賞しています。写真をご覧ください。学校を照らす「電気」として自然光を利用できる窓を設置しています。

また、地域の方が積極的にボランティアとして授業の中に入り、子どもたちは有機農法によって果物や野菜を育て、自分たちで食べるという活動をしています。

その他にも学校に電気の使用量が一目で



¹ 詳細については、平成27年度日本/ユネスコパートナーシップ事業報告書「これからのユネスコスクールを考えようーひろがり つながり ぶかまるESD推進拠点 Whole School Approach」を参照。資料のお問い合わせはACCU内ユネスコスクール事務局webmaster@accu.or.jpまで。
² エコスクールとは、幼稚園、保育園を含む学校での環境学習のためのプログラムで、1992年に国連により開発され、イギリス、デンマーク、ドイツ、ギリシャが第一陣として活動を始めました。現在59か国にまでその取組は広がっています。児童・生徒は、7つのステップに沿って、全校、保護者や地域の人を巻き込みながら取組を進めます。7つのステップを実施した後に、グリーンフラッグ取得のための審査を受け、活動が一定の基準を満たしていることが認められると、国際的な認証であるグリーンフラッグを取得することができます。



わかる測量計を設置し、子どもたち自身が電気使用に関するモニタリングを実施し、学校全体の電気エネルギーの使用量の削減に貢献しています。以上はほんの一例ですが、持続可能な学校づくりを具現化したこれらの取組は、イギリスのエコスクール政策の際の優良事例校として数多く取り上げられるようになりました。2015年1月にはエコスクール・アンバサダー（エコスクール大使³）として選出され、学校の中心に持続可能性の視点を加え、学校を超えてコミュニティや他校の変容に貢献しています。2016年にはイギリスを代表して「ユネスコ・日本ESD賞」の審査対象校に選ばれました。

子どもたちが社会問題を自分ごととして捉え、解決する術を探求するプロセスを大切に、具現化している学校です。しかし、どの取組もすでに実践しているという皆さんも多いのではないのでしょうか？アシュレー校の魅力は以上のようなひとつひとつの取組にも垣間見えますが、この事例をつなぐ理念が特徴的です。この理念はイギリスのチャールズ皇太子の提唱するハーモニーに基づいて創られています。ハーモニーに関しては後述しますが、人間と自然が調和していく方法を説くものです。現在アシュレー校では、それらを7つの原則として捉え直し、学校のカリキュラムの中心に据えています。このようにアシュレー校は、「持続可能性」「エコスクール」「ハーモニー」をテーマに発展し続ける学校なのです。そんなアシュレー校には480名の子どもたちが通い学んでいます。

³ エコスクール大使とは、2015年1月から2017年9月までを認定期間とし、18校が認定を受けています。持続可能な教育に関するプログラムを実践し、エコスクールの7つのステップを子どもたちが中心となって達成していくことで、結果的にエコスクール以外の学校にもその影響を波及していく役割を担っています。18校が連携し一つのコミュニティとして協働学習を展開していく点、またその活動を広く多くのコミュニティに行き渡らせる点で、今年度開始したサステイナブルスクールと類似しているところが多くあるのではないのでしょうか。アシュレー校のエコスクールとしての取組についてはこちら。<http://www.ashleyschool.org.uk/>

リチャード校長とハーモニーとの出会い

ワークショップ内で、リチャード校長が「あなたにとって持続可能性とは？」「持続可能な未来にとって必要な価値（Values）とは？」と参加者に問いかける場面がありました。リチャード校長は、持続可能な未来へ向けた挑戦や行動の源としてこのような「問い」が重要であると言います。このような問いを、学校生活の中で子どもたちも共に日常的に考え続けることにより、自然と未来を考えて現在の行動を選ぶことができるようになっていくのです。

リチャード校長のこの深い問いのスタート地点はどこにあるのでしょうか？リチャード校長は10年前ある探検家との出会いをきっかけに、南極大陸への訪問を果たしました。

この旅はリチャード校長にとって、人生観を変えるほどの大きな転機であったそうです。「南極大陸は手付かずの野生のまま、まさに『本物の自然』がそこにあるという強い衝撃を受けました。そして、そこで見た氷山は、私たちに変化を求める静かなるメッセージを伝えているように思えたのです。」と語っていたことが印象的です。

現在、温暖化によって地球上の気温は年々上がり続けています。そして南極大陸の氷は絶え間なく溶け続けています。その原因のほとんどが私たちの生活の中にあります。南極大陸の大自然を目の前にしたリチャード校長は「私たちはこのまま同じことを繰り返すこ



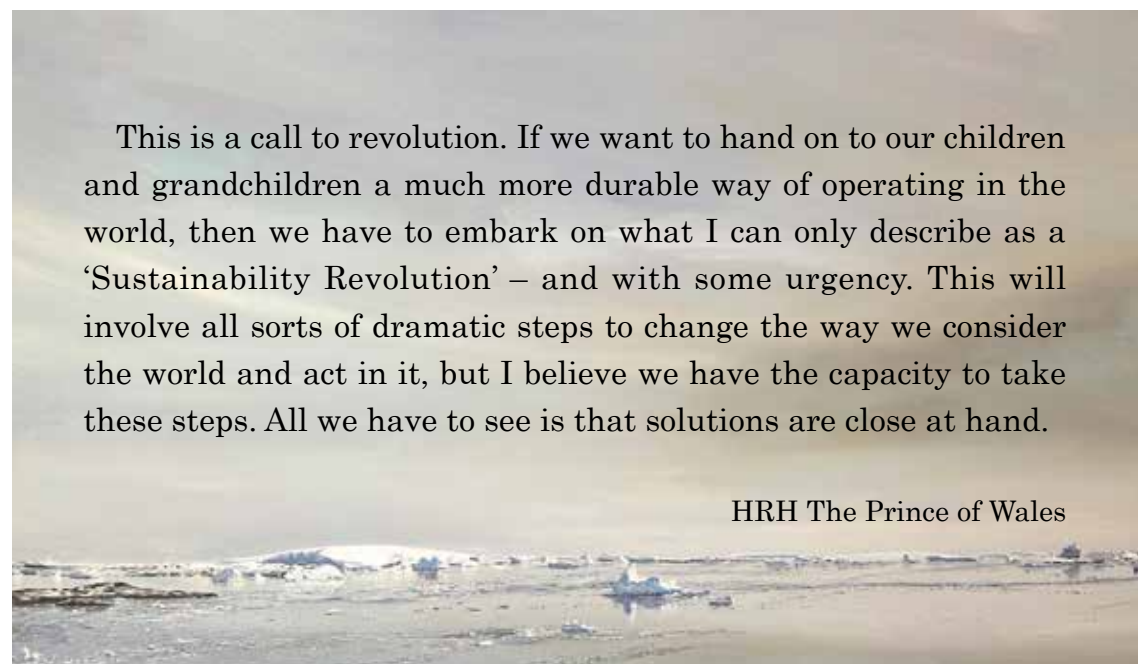
©John Luck



とも、変えることもできる。だからこそ、行動を起こさなければいけない。」と強く感じたそうです。イギリスに帰国後、彼は子どもたちにこのリアルな体験を伝えたいと思うと同時に、これまでの学習方法を変えなければいけないと思い立ちました。そこで、まず身近なエネルギーの使用について学習方法を考え直すことにしました。その結果、子どもたちと共にこのテーマに挑戦し、1年で50パーセントのエネルギー削減に成功しました。「サステナビリティとは何か」という問いは、リチャード校長にとって、自然を感じながら自分の行動を変容させるプロセスの根源になっているのかもしれない。その信念を支え

This is a call to revolution. If we want to hand on to our children and grandchildren a much more durable way of operating in the world, then we have to embark on what I can only describe as a ‘Sustainability Revolution’ – and with some urgency. This will involve all sorts of dramatic steps to change the way we consider the world and act in it, but I believe we have the capacity to take these steps. All we have to see is that solutions are close at hand.

HRH The Prince of Wales



る思想としてチャールズ皇太子の提唱する「ハーモニー」があります。「ハーモニー」とは、人間と自然が調和していく方法を解いています。人間の起源や、人間と共に発展してきた文化を照らし合わせ、元来人間は自然とどのように共生してきたのか、深い問いを繰り返し行います。現在アシュレー校では、それらを7つの原則として捉え直し、学校のカリキュラムの中心に据えています。

ハーモニーの7原則って？



11月19日のワークショップの冒頭、1分間の沈黙の時間を持ちました。皆さんは一日の中でどれだけの沈黙の時間を持ちますか。振り返ってみると、朝起きてから寝るまで、沈黙の時間を持つことができていない方が多いのではないのでしょうか。忙しい日常の合間に少しだけこのような時間を持ち、立ち止まってみることで、「自分にとってどんな困難な課題に対してもアイデアを出すことができるような集中力が湧き出てくる」とリチャード校長は語ります。アシュレー校の子どもたちも、学習の初めに必ずこのような沈黙の時間を持ち、学習への姿勢を整えます。この本を手に行っている皆さんも一度、1分間の沈黙の時間を持ってみてください。

原則 1 : サイクル・円 (循環) の原則

「サイクル」「円」と聞いて、あなたは何を思い浮かべますか? 「タイヤ」「月」「ライフサイクル」「生態系」など様々あります。アシュレー校では、このサイクルや円を大切にしています。海辺を散歩している時、自然に戻ることにないペットボトルやスーパーの袋が海岸を埋め尽くしているという光景を目にしたことはありませんか。

自然に戻ることでできない物質は、生態系を壊し、自然循環に適応していないことを意味します。皆さんの学校、もしくは活動の場には、どれほどの循環が見出せるでしょうか。アシュレー校では子どもたち自身がその循環を見出します。アシュレー校で出るゴミは、コンポストに入れられ、たい肥へと変化します。そのたい肥によって豊かな土壌が作られ、野菜や果物を栽培します。収穫物はその後子どもたちの給食として、また地域の人にも配布されるなど、循環の中に保たれます。

問いかけ：あなたが思い浮かべる「サイクル」「円 (循環)」は何ですか?

**問いかけ：日常生活で「サイクル」「円 (循環)」はありますか? 逆に止まっ
てしまっているものはありますか?**



原則 2 : 相互依存の原則

動物も人も相互依存の関係にあります。一見関係の無いように見えても確かに繋がっています。みつばちには特に有名です。相互依存はただ単につながっているわけではなく、お互い無くてはならない存在にあるということです。蜂は花の蜜を吸い、花は蜂の力を借りて子孫を残すことができます。

これは蜂の話だけではなく人間もそうです。人間と人間、人間と自然も相互依存の関係にあることを忘れてはいけません。したがって、大量に収穫出来るからと化学肥料を使い栽培した野菜は、果たして人間の体や自然にとって本当によいものなのでしょうか。相互依存の意味を知っているだけで、自分にとってもよい選択を容易にできるかもしれません。リチャード校長はこの相互依存を教科・領域の中にも取り入れています。この世界に分裂しているものはありません。

問いかけ：蜂と花のような「相互依存」関係をいくつご存知ですか。

問いかけ：教科・領域をつなげ、つながりを意識した学習をしていますか。

原則 3 : 幾何学の原則

幾何学の視点から世界を見ると、マクロな世界にもミクロな世界にも共通性があることが分かります。例えば地球の円と、葉っぱに落ちた雨水の円。台風の渦巻きと貝殻の渦巻き、頭をつむじも渦を巻いています。目の形と葉っぱの形、魚の形にも共通性があります。

ここから分かるとおり、私たちの目には見えない小さなものから宇宙の果ての大きなものまで、形状が相似関係にあることがわかります。自然と人間には共通性があり、人間も自然の一部であるということ意識することができます。感覚で捉えていたことをこうして意識化できるのです。古代から人間は不思議なことにそこに「美しさ」を見出してきました。自然の中から見出せるフィボナッチ数列の美しさと古代建築の美しさの共通性は決して偶然ではないということです。つまり、人の顔も貝殻の渦巻きも、パルテノン神殿も同様の規則性によって美しさが保たれているのです。それは自然界にも人間界にも共通の美があることを証明しています。その事実を知ること、何が人間や自然にとっての美しい「結論 (Outcome)」なのか、想像出来るようになります。



©NASA Goddard MODIS Rapid Response Team



コラム Real Textbook との出会い

ワークショップでもリチャード校長は教材として現物を用意しました。バッグから稲穂が出てきた時は驚きましたが、用意された魚や花や果物なども全て、人間の手が加わっていないそのままの姿のもので、それらを参加者が輪切りにしてみると、どんなものにも幾何学を見出すことができました。このような感動を、写真からではなく、その場でリアルに得ることが出来ます。それは学習者にとって忘れられない学びにつながります。



問いかけ：コンパスを使って自然界にある形を描いてみましょう。

- 1つ円を書きます。
- 2つ円を書きます。●ができました。
- 3つ円を書きます。▲ができました。
- 4つ円を書きます。■ができました。花の形にも見えますね。
- これを続け、7つ円を書いてみてください。◆ができました。

問いかけ：果物（みかん、キウイ、リンゴなど）を輪切りにしてみてください。

そこから幾何学との共通性を見出すことができますか。



原則4：多様性の原則

全てのものには多様性があります。人間も、花も、魚も多様です。見た目が多様であると同時に、その役割も多様です。アシュレー校では、様々な種類の野菜や果物を育てています。また、子どもたちも多様です。多様性には人種や信仰など様々ありますが、アシュレー校では特に子どもたちの役割にも多様性があります。子どもたちの中にも様々な役割があり、例えば「生ごみ測定リーダー」「生物多様性プロジェクトリーダー」「野菜栽培リーダー」「リサイクルリーダー」などです。自然界も多様であるように、人も多様に生きていくことの大切さを具現化し、まさにその中心で子どもたちは育っていきます。多様性は地球をレジリエントな（回復力がある）状態に保っています。このように、多様であることが地球の中で生きていく「使命」そのものを表しているように、アシュレー校ではリーダーとしての取組が校内での単なる役割に留まらず、地球市民の一員である意識づくりへつながっているのです。

問いかけ：あなたの身の回りでどんな種類の多様性を見出すことができますか。



原則 5 : 適応の原則

動物や昆虫は信じられないほど自然環境に適応しています。太古の昔から地球上に生きている全てのものが、生きているその場所の「環境」に適応して生きてきました。アシュレー校では、子どもたちが生活圏の「環境」に適応していくことができるように、地域の人に積極的に関わるようにしています。授業にボランティアとして地域の人を呼び、地域社会に生きていく上での「知恵」を子どもたちへ伝えてもらっています。知恵とはとても身近なもので、農家に来てもらい野菜の育て方を教えてもらったり、伝統工芸品（そこに息づく文化）の紹介してもらったりすることを指します。この経験を通して子どもたちは地域を知り、地域に適応していくのです。

問いかけ：地域の人やものを活かし、地域の「知恵」に関する学習をしますか？

原則 6 : 健康の原則

まず初めに、あなたは健康であるために何が必要ですか。良い食べ物、きれいな水、適度な運動、安全であること、愛されていること、様々な答えがあるでしょう。ただし、これは個人として健康であることを指しています。それでは、私たちが健康であり続けるには？アシュレー校の子どもたちからは私たちが価値づける、新しいことを学ぶ、互いのこ



とを気にかける、自然とつながっているなどの答えが返ってきます。さらに問いは広がっていきます。チームとして健康であることは？みんなが言うことを言えているとき、よいコミュニケーションを持てたとき、目標に向かってチームを導くリーダーシップを取ることができたとき、経験を楽しむことができたときなどです。このようにアシュレー校では常に個人として健康であること、そこにいるみんなが健康であることを問い続けます。それでは、最後に私たちの世界にとって健康なことは？全てのエネルギーがクリーンであること、ごみや汚染がないこと、生物多様性があること、公平で包摂的であるということなど、個人が健康であることと世界が健康であることは分断されているのではなくつながっていることをアシュレー校の子どもたちはすでに知っているようです。

問いかけ：あなたにとっての健康とは？家族にとって、世界にとっての健康とは？

原則7：一体性（つながり）の原則

最後に、人と自然、そして「神」でさえひとつながりであるということです。この7つめの原則はまさに全ての事柄・事象はつながっているということを表現しています。ワークショップの導入に沈黙の時間を取りましたが、これもまた大地と自分の「一体性」を感じ取るための一つの方法です。喧騒の中ではやり過ごしてしまうような、一体であるという感覚をこの時間で取り戻します。

もう一つ、重要なことはこのハーモニーの7原則も分断されているものではなく、ひとつながりであるということです。

問いかけ：学びの最後に、1分間の沈黙の時間を過ごしましょう



まとめ

つながっていることが無意識に心地よいと思っても、なぜつながる必要があるのかを明確に答えることは容易ではありません。しかし、アシュレー校で育つ子どもたちは、きっとその意味を答えられるのではないのでしょうか。ハーモニーの7原則は、「ハーモニー」の感性を身に付ける方法論と言っても過言ではありません。また、新しいことをするのはなく、現在やっていることを再確認してみることで達成できることも多いです。これは、アシュレー校やリチャード校長だからできることではなく、誰にでもできるということの意味しているのではないのでしょうか。重要なことは、子どもたちが学ぶ意味を知り、またアシュレー校の教職員全員がこの目標を理解して自分ごとのように捉えているということです。

コラム 自分ごととして捉えよう！

ワークショップ内でリチャード校長と参加者の間でこんなやり取りがありました。

リチャード：「学校にプラスチック製品を持ってくることを禁止している学校はありますか？」

参加者：「それはできないな…」

リチャード：「なぜ、できないの？」

プラスチック用品は、原則1の自然のサイクルを止める一要因であることは頭では理解できているのに、なぜプラスチック用品を使うことを止められないのでしょうか。このワークショップの後、私はプラスチック製品の購入を減らしてみることにしました。すると、自分の生活の中にどれほどのプラスチック製品があるのか、そして何よりも、日本国内にプラスチック製品自体が多く売られているということに改めて気付かされました。驚くほど、ほとんど全ての製品が「プラスチック」です。1週間、過ごただけでのビニール袋、プラスチックケース、ペットボトル等、プラスチックでゴミ袋いっぱいになります（ゴミ袋だって、プラスチック用品ですよ）。このようにリチャード校長の問いを受けて、日本国内の課題を意識化することが出来ます。これまで無意識にペットボトルのジュースを毎日飲み、厳重に包装されたお菓子をつまみながらそのゴミをビニール袋に入れて捨てる。日常的にあったこの光景が「普通」の光景ではないよ

うに思えました。そんな話を何気なく ACCU で話題にしたところ、こんな面白い話もありました。ACCU にはよく様々な国からの訪問があり、その度に様々な国のお土産をいただくのですが、ここで気が付くことの1つとして、そこから出る包装紙などのごみの少なさであるという話題が出ました。必ずしも衛生的とは言えませんが、他国とのゴミの多さの違いからも日本の現状を知ることができます。たしかに、リチャード先生の行動力や探求力があって今のアシュレー校があるということも事実です。しかしその一方で、私自身がリチャード校長のワークショップを通して、無意識なものを意識化/見える化できるようになったこともまた事実です。きっと、経済的支援がなくとも、意識変容だけでできることは無数にあります。アシュレー校の子どもたちや先生たちは、できないと切り捨てるのではなく、やってみることを大切にし、実際に多くの持続可能な取組を達成していています。ちなみに私にも少し変化があり、毎週、待ち遠しかったプラスチックゴミの回収日も、1週間パスしても問題がない程にごみが溜まらなくなりましたし、個包装ではなくなるだけ1つの袋に多く入っているお菓子を選ぶようになりました。3日坊主の私も意味を知ることから実行し、もうすでに継続3か月を突破しています。

(文 ACCU 教育協力部)

※特に記載のない限り、写真はリチャード校長の了承を得て国際ワークショップ当日の発表資料から抜粋しています。



【インタビュー】

リチャード・ダン校長

×

ACCU 進藤由美

(教育協力部部长)



進藤：リチャード校長、今日は本当にありがとうございました。今日のワークショップの印象を教えてくださいませんか？

リチャード：とてもよいワークショップでした。私自身楽しんで参加しました。参加者がみんな、積極的に参加し理解しようとしてくれているように思いました。ワークショップのはじめは、まず私自身が参加者の雰囲気理解していくことに努めました。私がイギリスで取り組んでいるハーモニーの哲学を紹介し、難しくならないように魚や花を使って表現し、私の話と関連付けていくことに時間を費やしました。昼食後はアイデアをシェアしたり、一緒に歌を歌ってくれたりしてくれました。違う立場の人たちが一緒にワークショップに臨んでいたことが特にとてもよかったように思います。

進藤：先生方はまさか歌を歌うとは思っていなかったと思います。

リチャード：二曲歌いましたね。一つ目は簡単な歌でしたので、初めて出会った仲間と一緒に歌うにはよかったかなと思います。

進藤：実は今回とても特別な機会だったのです。国際ワークショップとして、ESD Food プロジェクト¹の参加メンバーであるインド、インドネシア、タイからの参加者も一緒に先生のお話を伺いました。たいいては日本の先生だけなのですが、今回は海外の先生方と共にコラボレーションしながらのワークショップでした。いかがでしたか？

リチャード：とてもよい試みだと思えます。違うバック

グラウンドであったり、違うものの考えをしたり、そういう人たちが考えや文化をシェアすることはとても重要なことだと感じます。そうやって考えをシェアすることで、また違う新しい方向性が見えてきますからね。我々は多様性の中で生きていますから。

進藤：ありがとうございます。それでは、リチャード先生のバックグラウンドに関して質問させていただいてもよろしいでしょうか。ハーモニーの原則という素晴らしい教育システムを今回のワークショップで教えていただきましたが、どのようにしてこのような素晴らしい考え方を思い付き、実行しようとしたのですか？

リチャード：ある時、私は一冊の本を読みました。その本には世界のことや自然のことが書かれており、本当に素晴らしい本だったのです。その本は、“Harmony: A New Way of Looking at Our World” という本で、作者はチャールズ皇太子です。私に持続可能性とは何かということを知ってほしいと教えてくれました。私はその本を何度も何度も読み返し、ノートを取り、そのノートだけでも40ページにもなりました。

進藤：ハーモニーの本とはどういったきっかけで出会ったのでしょうか？

リチャード：本当にたまたま入った書店で見つけたのです。チャールズ皇太子が書かれた本であることを知り、その本がいかに素晴らしいものであるかを伝えるために私は皇太子に手紙を書きました。教育界ではこれまでなかったような物事の考え方だったのです。以来、皇太子との対話が始まり、そして皇太子は持続可能性に関わる人々を私に紹介してくれました。そのよ

うな中、ある日私は「7つの原則」という考えを見出し、その自分の考えを分析し、実践し、深めていきました。午前中のワークショップでも話しましたが、例えば、「幾何学」と「美」は別々の分野ではなく同じ分野のものとして捉えることができるのです。

進藤：幼少期はどのように過ごしたのですか？例えば、ご両親がオーガニックフードを育てていたとか…

リチャード：私の両親は…父は、あらゆることに疑問を持ち、それに挑戦していくような人です。彼は疑問と共にそれを解決していくことをいつもしていたように思います。私の母は、とてもかわいらしい人です。母と過ごす時間はとても平和で穏やかな時間でした。物事に対して常に疑問を持つことを教えてくれた父と優しい母、そのバランスがあったので、私はとても幸せな人間として育ちました。それから私は子どものころ美しい自然の中で育ちました。ですので、自然を愛することを学んだのです。

進藤：日本の先生へメッセージをいただけますか？

リチャード：日本の先生にだけ…というよりも全ての先生方に伝えたいです。私たちは試験やその結果のために子どもたちに訓練をしなければいけません。でも、もしそれだけをしていたならば、学びの重要性を知ることができません。私たちはテストがもたらす評価を理解しなければならない。でも一方で、その学びの目的を知らなければならないと思うのです。ハーモニーの原則はその理解を助けます。何を評価していくのか、そして何のためにそれをするのか、そのバランスを見つけ出すことが重要なのです。そうは言っても、私の国ではより強くテストでの評価を重視しているのが現状ですが…。

進藤：イギリスもそうなのですね。保護者の反応はどうですか？

リチャード：保護者は皆、テスト結果にはうるさくないですね。どのように学ぶかが重要だということに気が付いているからではないでしょうか。だから、(学区はあるが、引っ越すなどしてまで)この学校を選んだのだと思います。スイッチが切れて暗くなっている子どもより、元気でハッピーな子どもであってほしいと私は思っています。

進藤：次のステージについて教えていただけますか？教育の可能性に関してや自分自身など…。

リチャード：私たちはこれから「バランス」を見守り続ける必要があると思います。私はこれまでもそしてこれからも教えること、教育、そして子ども達を愛していきます。例えば、今日はとても面白い経験をしました。他の人々と考えを共有することがいかに大切かということです。今生きているシステム(社会基盤や制度)にしがみつけないということを学びました。私たちの未来にとって、持続可能性という考え方はとても大切なのです。

進藤：もし先生でなかったら何になっていましたか？

リチャード：もし先生でなければ、多分それでも別の形で子どもたちを支える、教師を支えるといった仕事に就いていたと思います。そうですね、私は食べ物が好きなので、農家に、いやその経験がないので農家にはなれませんね。でも農業にとっても興味を持っています。今日お見せした写真の中に、学校の活動を支援してくれている農家の方が写っていましたが、そんなことが私もできたらいいですね。食べ物の先生、オーガニックの先生でしょうか。

進藤：いいですね！今日は本当にありがとうございました。

¹ ACCUが企画・運営する「食」をテーマとした国際協働学習プロジェクト。



ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) について

人をつなぎ、知をはぐくみ、未来をひらく ACCU は日本と世界の人々と共に学びの輪を広げます

ACCU はユネスコの基本方針に沿ってアジア太平洋地域と日本国内で教育と文化の分野で活動しています。2015 年からは、ユネスコが実施する GAP のキーパートナーとして各方面と連携したプロジェクトの更なる発展に寄与しています。

ACCU は主に、「教育協力事業」「人物交流事業」「模擬国連推進事業」「文化遺産保護協力事業(奈良)」の4つの柱のもとさまざまなプログラムを行っています。

教育協力事業

文部科学省委託事業日本/ユネスコパートナーシップ事業に係る、ユネスコスクールやESD推進に関連する主な事業は本冊子に掲載のとおりです。ここでは、その他の事業を紹介します。

若者主体の持続可能なコミュニティ開発プロジェクト

アジア地域の若者(15～35歳)が、みずから持続可能な未来に向けてコミュニティ開発に取り組むプロジェクトです。ACCUはアジア地域のNGOと連携し、2015年度に実施したパキスタンとバングラディッシュに加え、2016年度はインド、インドネシア、フィリピンでも活動を深めています。現在、プロジェクトのこれまでの実践や各団体での知見を踏まえた若者リーダー用ガイドと、持続可能なコミュニティを創生するための5ステップを開発中です。5か国と連携し、2017年度に完成、発行を目指しています。



SMILE Asia プロジェクト

SMILE Asia プロジェクトは ACCU がアジアで推進する母子保健をテーマにした識字教育支援プロジェクトです。これまでにアジアの7か国で展開し、現在はカンボジアで実施しています。女性の関心の高い母子保健をテーマにし、家庭でも子どもと一緒に活用できる教材を提供することで、クラスを卒業した後も日常生活で、識字能力を使い続ける環境を現地の団体と一緒に作っています。

2016年度はブノンベン市より45kmほど離れた場所に位置するコンボンスプー州の5つの村において、75名の成人学習者(うち74名が女性)を対象に活動を実施。現地をモニタリング訪問したり、参加者からプロジェクトに関するヒアリングをしたりするなど、現地のニーズをより把握できるよう努めました。

このプロジェクトはチャリティーコンサートを開催して支援くださる凸版印刷株式会社はじめ、皆さまからのご寄附により行っています。



アフガニスタン識字事業

JICA(独立行政法人国際協力機構)が実施している「アフガニスタン国識字教育強化プロジェクトフェーズ2」に職員を派遣し、アフガニスタン教育省識字局とともに、同国識字局のモニタリング・技術支援能力の強化に関わる活動を行っています。治安状況の問題により、アフガニスタンへの日本人の渡航が難しいため、7月～8月にかけてインドへ日本人職員を派遣し、アフガニスタンから招へいた識字局職員と会合を持ち、制定したモニタリング・評価制度の機能状況を確認し、今後の活動計画を策定しました。

人物交流事業

教職員・生徒間交流プログラム

日本と海外の教職員や生徒間の相互理解と友好の促進を目指して、初等中等教職員等交流プログラムを実施しています。参加者がお互いの国の様々な地域、学校や教育・文化施設、一般家庭を訪問し、教職員や児童生徒との交流を深め、訪問国の教育制度や文化についての理解を深めます。

教職員招へいプログラム対象国:中国、韓国、タイ、インド
教職員派遣プログラム対象国:中国、韓国
高校生招へいプログラム対象国:タイ



模擬国連推進事業

高校模擬国連

支援企業からのご寄附を得て、次世代の国際人/グローバルなリーダーを育成することを目的にグローバル・クラスルーム日本委員会と協力し、高校模擬国連事業を実施しています。2012年度から高校模擬国連事務局として全日本大会を共催するほか、同大会での優秀チームを国連本部で開催される国際大会へ派遣しています。

文化遺産保護協力事業

文化遺産の調査・研究の中心である奈良に文化遺産保護協力事務所(ACCU奈良事務所)を設置し、国際機関と連携して文化遺産保護や文化財の保存修復を担う人材育成のための研修や国際会議を開催しています。また、県内の高校への出前授業や一般市民向けのセミナーも行っています。

ACCUに関する広報物

ACCU ニュース

年3回発行されているACCUの機関紙です。ACCUが携わるESD関連事業はもちろん、国際教育協力や人物交流などに関する様々な事業情報を発信しています。
<http://www.accu.or.jp/jp/accunews/2016.html>



ACCU ホームページはこちら!

<http://www.accu.or.jp/jp/index.html>
Facebookへのいいね!もお願いします。
<https://www.facebook.com/accu.or.jp/?fref=ts>



キラリ発進! サステイナブルスクール ～ホールスクールアプローチで描く未来の学校～

発行日 2017年3月7日
発行 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)
162-8484東京都新宿区袋町6 日本出版会館
TEL : 03-3269-4559 FAX : 03-3269-4510
URL : <https://www.accu.or.jp/jp/index.html>
Email : webmaster@accu.or.jp
翻訳・デザイン・印刷・製本 株式会社メディア総合研究所

©ユネスコ・アジア文化センター2017
ISBN978-4-946438-99-8
Printed in Japan
禁無断転載・複製



本冊子は平成28年度文部科学省「日本/ユネスコパートナーシップ事業」
によって制作されています。

